国語方言学

アクセントと方言

服部四郎

國語科學講座

— VII —

國語方言學

# アクセントと方言

服部四郎

株式會社
明治書院

國語科學講座

— VII —

國語方言學

# アクセントと方言

服部四郎

株式會社
明治書院

# 目次

# アクセントと方言

服部四郎

## 第一章　アクセントとは何か

「アクセント」なる語は、周知の如く、英語の accent より來た。後者は、ドイツ語の Akzent、フランス語の accent 等と共に、ラテン語の accentus に由來し、之はまた「言語の音調」[1]を意味したギリシヤ語 Prosôidia の譯語であつた。この語の語原をたづねてその意味の變遷を檢討することは無意味ではないが、以下の所論にとつて非常に重要なことでもないから略しよう。之等の語が、現今歐洲に於て如何なる意味に用ゐられてゐるか[2]を考察することは、それよりは重要であるが、紙面を割愛して、今は一足飛びに、「アクセント」なる語が國語に於て如何なる意味を有するかについて考へて見よう。

この語は、現今に於ては、國語の語彙の中にかなり安定な地位を有するものと云へよう。幾分學問的な臭味を帶びてはゐるが、音聲學や言語學に沒交渉の人々によつて自由に使はれてゐる。從つて學問上の術語として用ゐるには吟味を要するのである。私はこの語の意味を大體三つに分けることが出來ると思ふ。

(一)或單語の或音節に於て音が特に強いか或は高い現象、
(二)或單語に於て音節間の音の强弱・高低の關係が相對的にほゞ一定してゐる現象。
(三)文全體の調子。

右の中、(一)が最も普通のものである。「この單語は何處にアクセントがある」「鼻と云ふ語は平板的でアクセントがない」等は皆この意味である。之より更に轉じて、その所在を示す記號を意味することさへある。「この本にはアクセントがついてゐない」等。

(二)の意味に用ゐられる事も決して少くはないが、明瞭な意識を以て使用せられることは殆んどない。その背景に、(一)或は(三)の意味がぼんやり浮んでゐる。音聲學者等のみが之に近い意味に限つて用ゐる。[3]

(三)の最も明瞭な用例としては、「鹿兒島の或地方の方言は、意味はちつともわからなかつたが、アクセントが琉球語のに非常に似てゐた。」等。意味がわからない以上(一)或は(二)の意味のアクセントを比較する事は出來ない。[4] かゝる意味に用ゐられることも少くはない。

歐洲に於ても、右に述べたのとほゞ同様の色々な意味に用ゐられるのは興味がある。

併し乍ら、音聲學上の術語として使用するには、意味を限定しなければならない。同時になるべく最も普通に用ゐられる意味を採るべきである。[5] 故に(一)の意味に定めるのが穩當と思はれる。然るにその場合には、(二)をあらはすべき適當な名稱の缺亡を感じる。又、佐久間博士以來、音聲學上、「アクセント」を(二)の意味に用ゐる人は少くない。私はこの習慣に從つて、一般の人々には多少目障りにならうが、(二)の意味に限つて用ゐて行きたいと思ふのである。[6](又今日

までも用ゐて來た。)そこで、(一)及び(三)に對する名稱をきく人があらう。(一)に對しては「アクセントの山」[7]或は「アクセントの頂點」がよくはなからうか。(三)卽ち文全體の聲の高低を意味するはヂョウンズ氏 D. Jones 等の云ふ 'intonation' と云ふ語である。遺憾乍らこの語の譯が一定してゐない。[8] 私は一部の人々と共に「(文の)調子」と云つてゐるが、「調子」を 'pitch' に當てる人もある。「音調」など云ふのがよからうか。

次に、アクセントに「强弱アクセント」stress accent と「高低アクセント」pitch accent とあり、國語のが後者に屬することは定說である。この場合の「アクセント」は右に示した中の(二)の意味である。私の知る限りの方言に於て、[9] 音の强弱の波は著しくなく、單語(文典に云ふものとは一致せず、實は吟味を要する)に於て、音節間(或は內)の聲の相對的高低關係がほゞ一定してゐる(變化する場合には一定の法則に從ふ)現象を認める[10]が故に、私はこの說に贊成である。

强弱アクセントを有する言語では、音の强弱が著しいが高低は著しくない、高低アクセントの言語ではその逆である、との考へが、一部の人々の間に行はれてゐるが、それは正しくない。普通の會話を聞いてゐても、典型的な强弱アクセントの言語なる英語やドイツ語の方が、國語より、聲の高低の波が遙かに著しいではないか。兩種アクセントの相違は、一定してゐるものが音の强弱關係か高低關係かと云ふ點にある。

兩種のアクセントの區別は、一般に信ぜられてゐる如く、確かに存すると思ふが、シュミット氏 A. Schmitt はその著「一般アクセント論論究」Untersuchungen zur allgemeinen Akzentlehre (Heidelberg, 1924) に於てその存在を否定してゐる。併し、氏の所說と吾々のとは論點が違つてゐる故、たとひ氏の說が全部成立するとしても、吾々

は何等の痛痒を感じないのである。或種の誤解を除く爲めに、又氏の說には多少暗示的なものがある故に、こゝに簡單に紹介しようと思ふ。

氏は先づ 'Akzent' なる語の色々な意味を列擧する。その中の所謂「音節アクセント」Silbenakzent のかはりに、'Intonation' を、所謂「語アクセント」Wortakzent、「文アクセント」Satzakzent のかはりに 'Akzentuation' 或は 'Akzentuierung' を用ゐることを薦めて、該論文で 'Akzent' を 'Akzentuationsgipfel' 卽ち前述の「アクセントの頂點」の意味に用ゐることに決定する。氏の論難の矢が、もし吾々に向けられたつもりならば、放つ前に旣にくるひが生じた。所謂 'pitch accent' の 'accent' は、前述の如く、氏のこゝに限定した如き意味ではないからである。氏は更に續けて、文又は語の或部分を水準よりもちあげる手段として、强さ・高さ・長さの三つがあるとの、ゼールマン E. Seelmann の古い說(一八八五)を引用して、シュレイネン J. Schrijnen やルスロ P. Rousselot によつて受繼がれた「長さのアクセント」quantitativer Akzent なるものを許容すべきかについて論じ、長さは「山」Gipfel ではあり得ないとて、「强さのアクセント」exspiratorischer Akzent と「高さのアクセント」musikalischer Akzent の二つのみを認める。(この點についても議論はあらう。)更に論を進めて曰く、强さと高さとは多く相伴つてあらはれるが、常にさうとは限らないから、兩種のアクセントは理論的には可能の樣に思はれる。强さの山と高さの山とが別々にあらはれる時は、(ドイツ語等に於て屢々起る如く)それが一時的の現象であれば、いづれが主たるものであるかを見分けるのは容易だ。如何なる場合にも位置を變へない方の山に目をつければよいわけだから。(こゝで、氏の「アクセント」なるものが一時的の山を意味しない事がわかる。)所が、スエーデン語やセルビヤ語の或方言に於ける如く、固定し

た現象だとその決定は困難だ。不可能な場合もあるわけである。實際の言語に於ける例如何。常にその位置を變へない强さの「アクセント」(氏の用ゐる意味の。以下「　」に入れて示す)を有する言語は直ちに見付かる。ドイツ語・英語等がそれだ。ところが高さの「アクセント」の場合には簡單には行かない。スヱーデン語は如何。コック A. Kock の所謂第二アクセントは、語幹に强さの山があり語尾に高さの山があるが、前者が「アクセント」として感ぜられてゐる故に、又、音の强弱關係は少くとも標準語 Reichssprache に於ては到る處で同樣なるにも係らず、高低關係は知識階級の間にあつてさへ地方々々によりきはめてまち〳〵なる故に、スヱーデン語は高さではなく强さの「アクセント」を有すると云はなければならない。次にフランス語。この國語に於ても、ドイツ語と同樣、聲の高低關係は文アクセントによつて色々に變化するけれども、强さの山は、それは低いものではあるが、ほとんど位置を變へない。即ちフランス語も强さの「アクセント」を有する。他のロマンス語(イタリー語、スペイン語等)に於ても事情は同じ、强さの山が一層著しい位のものだ。バルトスラブ語派の中に高さ「アクセント」の言語はなからうか。有名なリトワニヤ語でさへ、嚴密に吟味するならば、强さの關係のみが動かないもので音調は可變的であり前者に主位を讓ると云ふ意見に、多くの學者が一致してゐる。レット語も强さ「アクセント」の言語である。スラヴ語の領域で吟味の俎上にのぼり得るは、スロヴェーヌ語とセルビヤ語だが、强さ及び高さの記號のついたテキストを調べると、やはり强さ「アクセント」の言語だとの結論を得る。支那語・シャム語・ビルマ語は高低アクセントを有すると云はれてゐるが、之等の言語の單語はすべて一音節よりなり、從つて著者の所謂「語アクセント」Wortakzent(「單語(多音節の)に於けるアクセントの頂點」の意)はこゝでは問題とならない。次に日本語は多音節の單語を有するから考慮にはひるが、多少

特色があるとは云へ明かに强さ「アクセント」を有する(Edwards, § 142 ff.)。最後にアフリカの言語がある。マインホーフ K. Meinhof の記述によると、スダン語では、聲の高低關係は重要だけれども「語アクセント」を形成するはたらきはない。又、エンデマン Ch. Endemann の說明を見ると、バントゥー語では聲の高さのみで語を區別する場合が多いが、大切なのは、支那語に於ける如く高低の波ではなくして、絕對の高さである。故にバントゥー語の高低アクセントは、著者の「高さアクセント」とは全く別の物を意味する。かくして「高さアクセント」は實在しないとの結論に達した。理論的考察もこの結論を支持する。强さと高さとは並び立つものではない。强さは、零の點から、考へ得る最强の段階まで、あらゆる段階を區別し、後者へ向ふ運動(弱→强)をプラス、前者へ向ふ運動をマイナスとする事が出來る。高さの場合には、考へ得る最高の高さをプラスの極、同じく最低の高さをマイナスの極とする事は出來ない。又零の點なるものも存しない。高低の波のどの部分も同じ價値を有し、高とか低とか云ふは純粹に質的の區別である。所が强弱の波は價値の區別に關係してゐる。吾々は次の點を確認した。單語のアクセントの頂點は常に强さの頂點である。從つて高さのアクセントなるものは不可能である。故に强さアクセントと高さアクセントの區別は放棄しなければならぬ。けれども、この重要とされた區別のかはりに新しいものを導き入れる事が出來る。その區別は英語とフランス語を觀察すれば明かになる。前者では「アクセント」のある音節に心理的並びに物理的なはたらきが集中し、「アクセント」のない音節は恐ろしくなほざりに發音される。フランス語ではさうでない。どの音節もなほざりにされず平均に强められ、「アクセント」のある音節が他よりもやゝ强められる次第だ。前者の如きを「集中力强きアクセント」stark zentralisierender Akzent、後者の如きを「集中力弱きアクセント」schwach zentralisierender Akzent と名

附けよう。併しこの區別は原理的のものではなくて段階的のものである。從つて兩者の間に連續的な中間物の列を考へ得るし又實在する。歐洲の言語で云へば、前述の如く、英語とフランス語が兩端をなし、イタリー語・スエーデン語が中間に位する。

以上が氏の所說の要約であるが、氏に從ふと、日本語は右に持出された段階の最下點に置くべきで、アクセントの集中力は零に近いとの事である。本書を通覽するに、日本語について論及する場合にはエドワーヅ氏 E. R. Edwards の「日本語の音聲學的研究」Étude phonétique de la langue japonaise (Leipzig, 1903) が常に提據とされてゐる。エドワーヅ氏の著書は優秀なものではあるが、アクセントに關する部分に缺陷の多いことは定評であつて、之を唯一の根據にして日本語のアクセントを論ぜられるのは、甚だ迷惑である。本書は他の部分に於ても、直接の觀察よりも、文獻を通しての考察が多く、單に紙上の論に終りはしないかとの危惧の念を懷かせる點が少くない。

氏の云ふ如き意味の「高さアクセント」を有する言語が假りにないとしても、吾々の意味の「高低アクセント」を有する言語が歐洲に於てさへ存しないことにはならない。少くとも吾々は日本語に於ては確實な實例を見出す（氏は勿論日本語のこの現象に觸れてゐない）。バントゥー語に於ける現象も吾々に云はせれば「高低アクセント」である。氏が日本語に於けるこの現象を知つたならば、恐らく別の名稱で呼べと云ふに違ひない。呼んでも別に差閊へはない。吾々が之を「高低アクセント」と呼ぶのも慣用に從つたに過ぎないのだ。

のみならず氏の所論には首肯し難い點が外にもある。例へば、右の如きアクセント論は、一つの狹い方言の共時的な觀察に根據を置くべきで、他方言との比較は別問題である。スエーデン語のアクセントを考察する際に地方的な差

異をもち出して、しかもそれをこの言語に於て强さの山が「アクセント」である事の根據としてゐる如きは見當違ひであると思ふ。たとひ氏の所論がすべて正しいとしても、繰返して云ふが、日本語に於ける所謂アクセントなる現象の存在は、微動だにしない事實である。

註 1 この點については、色んな辭書の外に、次の書などを參照されたい。
A. Schmitt: Untersuchungen zur allgemeinen Akzentlehre. Heidelberg, 1924. § 12.
佐久間鼎「日本音聲學」京文社、昭和四。三八一頁以下
J. Marouzeau: Lexique de la terminologie linguistique. Paris, 1933. 13 頁以下

2 E. Saran: Deutsche Verslehre. München, 1907. § 3.
A. Schmitt: Untersuchungen (前出) § 2.
H. Hirt: Indogermanische Grammatik, Teil V: Der Akzent. Heidelberg, 1929. § 2.
J. Marouzeau: Lexique (前出) 13 頁以下

3 この意味に限つて用ゐるのは學者の勝手に過ぎない。「第何音節にアクセントがあると云ふ云ひ方は意味をなさない」などと頭から叱りつけるのは、言語そのものに對する理解が足りない。

4 英語で 'foreign accent' と云ふ場合の 'accent' は之に近い意味だが、更に廣く音の强弱は勿論、「調音基底」 basis of articulation も含んで居る樣である。

5 「語調」と云ふのも惡くはないが、「アクセント」程ポピュラーではないし、「語」と云ふ字が感心しない。文字から離れる

と、一層「アクセント」に劣る。

6 この用法は歐洲の學界に於ける一部の慣用とも一致する。所謂 'stress accent, pitch accent' 等云ふ場合の 'accent' は之に近い。比較、

E. Sievers: Grundzüge der Phonetik[4] (Leipzig, 1893) § 619

L. Roudet: Élément de phonétique générale (Paris, 1910) § 113

7 D. Jones: An Outline of English Phonetics[3] (Leipzig, 1932) § 1007

8 佐久間博士。語調(=言葉調子){日本音聲學、索引、七頁}

音聲學協會。音調、句調、言葉調子、語調{音聲の研究I(昭和二、五四頁}

9 雜誌「方言」一ノ一・三・四、二ノ二・四・七・八・十・十二、所載の拙稿にあげられた方言。

10 第二章一六頁、第三章二二頁一二行參照。

## 第二章　アクセントと强調

「强調」とは、英語の emphasis に對する音聲學協會の譯語である。(1) 强調とアクセントの關係を考察することは、日本の學界では等閑に附せられてゐるが、アクセントそのものに對する理解を深めるためにも、極めて重要であると思ふ。英語に於ける所謂 emphasis に、根本的に區別さるべき二種のあることを始めて明瞭にしたのはコウルマン氏 H.

O. Coleman であつた。その論文 "Intonation and Emphasis"[2] は、國際音聲學協會の機關雜誌 "Le Maître Phonétique" の二十五周年記念のための論文集 "Miscellanea Phonetica, I" (1914) の六頁より二十六頁までを占めるものである。

氏の說は、以下の私の所論に關係の深いものであるから、その要點をこゝに紹介しなければならぬ。先づ論の切り出しとして曰く、[3]

In considering the first of the questions before us, namely the meaning of the word "emphasis," we find that the word has long been in use to denote either of two very different things. The difference between the two uses is (when once pointed out) so obvious that it is strange that it should have hitherto remained unnoticed, as far as I have been able to discover, by grammarians, logicians and elocutionists. (§ 6)

かくして多くの例をあげてゐるが、その中から四例を示せば、

(a) You may call it DARK BLUE. I should say it was BLACK.
(b) Good heavens, child, where have you been ? You're BLACK.

(a) (In a heated argument). That a fox ? Why, good heavens, man, it's a WOLF.
(b) (In telling an adventure). Right in front of me stood a WOLF.

右の文例に於て、大文字で印刷した單語はいづれも强調を受けるが、(a)と(b)とで全くその性質を異にする。(a)に於ては、'black' 'wolf' は夫々 'dark blue' 'fox' に對比されてゐる。かくの如く、他の語と對比する爲に、或は文中の

特に注意のそゝがれてゐる主要語なるために、その語に加へる强調を "Prominence"（甚だ拙いが「卓立の强調」と譯する事にしよう）と名附ける。(b)に於ては、'black' 'wolf' を他の語と對比する爲に强調するのではない。「その語の意味に幾分恐怖の效果を加へる爲め」to *add* some effect of horror to the meaning of the word である。之を "Intensity"（うまく當らぬが「誇張の强調」と云はう）と呼ぶ事にしよう、と。かくして氏はこの兩者に次の如き「定義」を與へる。

The first kind of emphasis may be defined as that manner of utterance which marks any word or phrase as of greater importance than its neighbours. This kind of emphasis may be termed *Prominence.* (§14)

The other kind, which may be termed *Intensity,* may be defined as that manner of utterance which imparts an added degree of intensity to some part of the idea represented by a word. (§15)

次に兩種の强調が表示される手段を考察するに及んで、兩者が原理的に明瞭な區別を有するばかりでなく、表示手段の上にも根本的な相違のある事を明かにする。Prominence に於ては、强調される語に於ける、アクセントの頂點のある音節の中或はその後に、聲の著しい下降が必ずあらはれ、その intonation が stress よりもむしろ重要であると主張して次の如く結論する。

For the suggestion of *Prominence,* intonation appears, then, to be practically the sole instrument. (§24)

然るに Intensity はさうではない。種々様々の手段によつてあらはされる。

Intonation cannot, however, be regarded as the *essential* of intensifying expression. There enter into it a number of other factors — special stress, extra slowness, extra quickness, length of word, additional words *before* the intensified word to gain attention by keeping one waiting, pauses with the same object, and other devices, such as repetition or additional words generally. (§ 27)

而してその色々の實例をあげてゐる。次に英語の文の調子の問題を論じてゐるが、こゝには直接關係がないから略しよう。

氏は論文の冒頭に註して、以下に述べる所は英語に關してであるが、それは大體ドイツ語にも當て嵌まる樣であり、更に研究すれは、恐らく、今まで音聲學者が "stress-accent" を有すると云ひならはしてゐた言語についても大體眞である事がわかるだらうと云つてゐる。

然るに、國語に於ても右の强調の二種の區別が明かに認められると、私は思ふのである。[4]

「秋は空が綺麗だ」と云ふ文の東京語のアクセントを示すと、「ア|キワソ|ラガキ|レーダ」となる。右に棒のついた部分は、つかない部分より聲が高い。[5] 併し棒のついた部分が皆同じ高さだとの意ではない。それにアクセントの山があることを示したものだ。實際の發音ではそれが色々の高さになつて現はれる。もし話手が、「春や夏はさうでもないが秋は……」と云ふ樣なつもりで發音すると、「ア|キワ」が卓立の强調を受け、「ア」が高く强く「キワ」が低く弱くなり、兩者の高さの差が大きくなるばかりでなく、「ソ|ラガ」「キ|レーダ」の高さの山が非常に低くなる。「ソ|ラガ」のは全く消失すると云つてよい。今卓立の强調を左に～～を附して示すと

アキワソラガキレーダ

は實現された聲の高低の姿が殆んど

アキワソラカキレーダ

に近くなつて了ふ。（—は—よりも聲の高い事を示す。但し、—と—とを區別する必要なき場合はすべて—を用ゐる）

次に「秋は天地すべてがきれいだが、殊に空がきれいだ。」と云ふ樣な氣持で發音すると、「ソラガ」が卓立の强調を受け、「ソ」と「ラガ」との高さの差が大きくなり、「アキワ」と「キレーダ」の高さの山が著しく低くなる。但し、「キレーダ」の山は消失するに近いが、「アキワ」のはやゝ明瞭にあらはれることが多い。實現された高低の姿はほゞ次の樣になる。

アキワソラガキレーダ

或は又、「きれいだ」と云ふ語を相手がきゝ落さない樣に特別に注意して發音する必要が起つたとすれば、「キレーダ」の山が特に著しくあらはれる。この場合、「アキワ」の山は前の場合よりもやゝ明瞭にあらはれる事が多く、「ソラガ」のは消失すると云つてよい。

アキワソラガキレーダ

上述の如く、この文の三つの部分（「文節」(6)と云ふ）は各〻卓立の强調を受け得るが、その際に現はれる聲の高低の姿は、アクセントの型にもとるものではない。否、アクセントの型の姿が明瞭に實現されたと云ふべきである。一々の音も明瞭に調音せられる。

强調を受けない文節も、著しい高低の姿があらはれないとは云へ、音節間の高低關係が逆になることはない。右にあげたすべての場合を互に比較するに、一文節について云へば各音節の絶對的な高さは(各個人に於ても)一定してゐないが、音節間の相對的高低關係は一定してゐると云へるのである。

誇張の强調の場合は全く趣を異にする。「だまつて坐つてゐた」なる文の「だまつて」と云ふ語がこの强調をうける時には、卽ち「だまりこんで一言も口をきかずに(動きもせずに)坐つてゐた」と云ふ意味をあらはさんとして、

〔dḁmḁ::ttosuwattomaʃitajo〕

等と發音するのを聞く事が屢〻ある。この場合、最初の〔t〕があらはれるまで「こゑ」のかはりに非常に强い「さゝやき」(whisper)があらはれる(便宜上無聲の記號〔◦〕を以て示した)。〔d◦〕は「帶氣音」aspirate となる事があり、〔a◦〕は恐ろしく長い。同時に異常な表情や身振まで伴ふことも多い。同様に、

〔t'ama::ni〕(偶に)、〔ta̦k'a::i〕(高い)

等と云ふ發音もきく。前者は非常に高い平板的な調子を以て發音され、後者は「タカ｜イ」と云ふアクセントとは關係のない音調をとることがある。東京人が非常に興奮して「フ｜ンカイシタ｜ヨ」(「フ」を强く高く、「タ」をたゞ高く)と云ふのをきいた。「憤慨」のアクセントの型は、東京語で所謂「下中中中」だ。又、私は鄕里(三重縣龜山町)の方言に於て、多くの興味ある例を集め得た。「セーサ｜イ」と云ふは「充分」「思ふ存分」と云ふ程の意の副詞であるが、この强調を受けると、

「セ｜ーサ｜イ」

の如く、この方言のアクセントの型としては許し難い二つの山が出來る。〔e〕も普通の場合より長くなる。形容詞には

例が多い。

〔ʔakk'a::ini〕

は「とても赤いよ」との意だが(子供がよく云ふ)、聲が低く始まつて長い〔a〕の終り近くから〔i〕へ急に上り次の〔ni〕へ又急に下つて行く、〔ア|カイ〕と云ふアクセントから凡そ遠い音調だ。

〔ussu::ini〕

は、聲が高く弱く始まつてそのまゝほゞ平板的に進み最初の〔i〕あたりから急に下降する。やはり〔ウ|スイニ〕(薄)と云ふアクセントから離れて了つてゐる。

〔ʔaʔʔo::iwa::〕

は〔ア|オイワ〕(靑)を強めたものだが、母音間に〔ʔ〕の來る事は普通の場合にはない。

〔ku̥d̥d̥o::izo〕

が「黒いぞ」から來たことを聞いて驚かぬ人は少いだらう。〔d̩〕は〔r〕の位置で密閉を作つて生じた。(前二者とも、音調は〔ʔakk'a::ini〕に近い。)以上形容詞の例は、「薄いに」を除いて、いづれも非常に強く發音され、終りの助詞の部分で急に弱まる。更に著しい例をもう一つ。

〔d'ǿ::r'a::ımoĩjazo::〕

は「どえらいもんやぞ」〔ド|エライモン|ヤゾ〕の強められたもの。(8) 音調は概略的に云ふと、〔ɪ〕まで低く平板的で〔m〕から急に高く平板的に進んで最後の〔o〕の中で次第に下降して行く。聲の低い部分が強く高い部分は弱く更に次第に弱まる。

以上によつて明かなる如く、誇張の强調は屢々單音を變じアクセントの型を毀す。前述の〔d·〕〔d'〕〔ɸ〕などは、龜山方言の音韻體系の中には見出されぬ音聲である。(9) この點で卓立の强調とは大いに相違してゐる。之等が、一時的の發音でなく、度々用ゐられる樣になると、云はゞ固定して、その言語の體系の中へ攝取されることがある。(10)「あつぱれ」「やつぱり」「あんまり」「おんなじ」「まんま」（儘）などは、かくして生じた形であらう。龜山方言では〔ア|ッカイ、ウ|ッスイ、ス|ーイ〕の如き形がくだけた會話には多くあらはれ、〔ア|カイ、ウ|スイ、ス|イ〕等はや〻標準語的なあらたまつた樣な感じを與へるに至つてゐる。(11)

誇張の强調の手段としては、上述の音調や强さや長さ等の外に、コウルマン氏の云ふ如き、色々のものがある。(12) 今こゝに一々とく必要はないが、「まつか」「まつさを」等の如く接頭辭をつける事や同じ語の反覆等はよく行はれる。京都方言では、私の方言で〔アッカーイ|ハナ〕（赤い花）と云ふ所を、〔ア|カイア|カイハ|ナ〕と云ふ。

その性質上、形容詞や副詞が誇張の强調を受ける事が多い樣だが、動詞も屢々强められる。(13)「おつこちる」(14)「ぶんなぐる」等。私の方言で、〔ケッタル〕（蹴つてやる）を「蹴る」のかはりに好んで用ゐる。(15) その含む促音が、强調の要求に適せる爲であらう。古い「蹴(け)て」に對して、多くの方言で〔ケッテ〕と云ふが、四段に類推したものか、强められたものか簡單には決定しがたいであらう。

上述の如くアクセントは、卓立の强調まではその型を保存してゐるけれども、誇張の强調によつて毀される事が少くない。强調に關係なくとも、非常に感情的な會話や朗讀・演舌の口調に於て、アクセントの型とは無關係な音調の

あらはれる事も屢々觀察される。歌謠に至つては、それと沒交渉の旋律を示すこと[16]は、人の知る所である。

註

1 「音聲の研究Ⅰ」五四頁。

2 最近、岩崎民平氏によつて全譯され、「音調と强調」と題して、市河三喜教授編輯の「英語學パンフレット」(研究社發行)の第三編(三十五錢)として公にされた(昭和八年四月)のは喜ばしい事である。

3 原文に接し得る人は少からうと思ふから、こゝには英文のまゝ掲げる。譯文については岩崎氏のを見られたい。

4 コウルマン氏の論文を讀む以前からこの點に多少氣附いてゐたが、之を一讀するに及んで明瞭な見解に達した。それは三年程前の事であつたが、今日までこの見解を發表する機會がなかつた(卒業論文には書いておいた)。發表される論文については注意を怠らなかつたつもりであるけれども、まだ明瞭に說かれた事をきかない。昭和六年七月四日の音聲學協會の講習會に於ける神保格教授のお話は、「卓立の强調」には觸れたが、「誇張の强調」及び兩者の區別には及ばなかつた。私はこの機會に充分この點を强調したいと思ふのである。

尙、有坂秀世君の論文「音聲の認識について」(音聲の研究Ⅳ、昭和六)は「卓立の强調」の原理的考察に對し、多くの說明と暗示を與へるものである。

又、支那語の如き言語に同樣な現象が見出されると面白いと思つて注意してゐた。支那語には「重念」なる語があるが、之は音聲學的に云ふと、「語アクセント」と「强調」と二つの概念を含んでゐる。從つて支那の音聲學者汪怡氏は「重音」Accent と「語勢」Emphasis に分けて論じてゐる(「國語發音學」、上海、民國十五、再。二四六節、二五〇節)。カールグレン氏 B. Karlgren は「北京官話發音讀本」"A Mandarin Phonetic Reader, in the Pekinese dialect, with an introductory

essay on the pronunciation" (Upsala, 1917) の 'Stress' なる項（三六—六一頁）に於て、この問題を論じてゐる。"A. Dissyllabic and polysyllabic words" (p. 38—51), "B. Affixes and affix words" (p. 52—59) に述べてゐる所は、汪氏の「重音」に當る現象であり、「語勢」に當る現象は三八頁に多少言及してゐるに過ぎない。汪氏やカールグレン氏の説明する所も、支那語學習に際し注意される「重念」も、すべて「卓立の强調」である。「誇張の强調」について曾て闞瑾良先生にお尋ねしたことがあるが、明かにする事が出來なかつた。

5 この點については異論があらう。第三章二八頁一〇行以下比較。

6 第三章二二頁參照。

7 第三章二三頁參照。

8 勿論上品な云ひ方ではない。併し「べら棒にでけえんでゐやがら」ほど下品ではない。子供などよく使ふ。

9 從つて、かゝる音聲はこの方言の音韻の記述からは洩れるであらう。併し音聲學者は彼等を見逃さない。一言語の音韻の記述的研究と、その言語の音聲學的研究とは、かゝる點で相違してゐる。所謂「特殊音聲學」（國語音聲學・英語音聲學など）と、一言語の音韻方面の記述的研究とは、混同すべきでないと私は思ふ。

10 小林英夫氏譯「生活表現の言語學」（明治圖書株式會社、昭和四）二三五頁比較。

11 「方言」一ノ四、一八頁。龜山方言では、更に、〔アッ カイ〕なる音調がアクセントとしての資格を得ようとしてゐるかに見える。〔アッ カイオテモト〕（赤いお箸）。小林氏「生活表現の言語學」四〇一頁比較。

山本正秀氏に從ふと、高知縣土佐郡一宮村德谷方言では、形容詞に、二種の形とアクセントを有するものが多い。（後者は意味が强い）〔アカイ、アッカイ〕（赤）、〔タカイ、タッカイ〕（高）、〔アツイ、アッツイ〕（厚）、〔カタイ、カッタイ〕

（堅）、「ク|サイ、クッサ|イ」（臭）、「ナ|ガイ、ナンガ|イ」（長）、「ア|マイ、アンマ|イ」（甘）、「シ|ロイ、シーロ|イ」（白）、「ハ|ヤイ、ハーヤ|イ」（早）、「ヨ|ワイ、ヨーワ|イ」（弱）、「ア|オイ、アーオ|イ」（青）。この中、促音・撥音を含むものの方が、長母音のものより強い感じがすると云ふ。

「土の香」九ノ一（昭和八年三月）の與田左門氏「紀北地方の形容詞」にも面白い記述が見える（六頁）。

12 小林氏「生活表現の言語學」六二—三頁比較。こゝにあげられた例は「强調」のみに關係せるものではないが。

13 J. Vendryes: Le langage (Paris, 1921) p. 181 には、アラビヤ語の次の如き例が見える。

châbat（彼が打つ） châbbat（彼が強く打つ） kásar（彼が毀す） kassar（彼がこなごなに毀す）

14 金田一京助先生「國語音韻論」（刀江書院、昭和七年）三一四—五頁にある如く、コンタミネイションも關係してはゐるだらう。但し、この語は東京語で意味の強さを失つて近畿方言などで單に「落ちる」と云ふに相當する場合に用ゐられる。

15 この場合には、「誰に繪を書いたる」等の「カイタル」（書いてやる）と異なり、「やる」の意味が稀薄で、單に「蹴る」と云ふに近い。「ケレ」よりも「ケッタレ」を、「ケロ」（蹴らう）よりも「ケッタロ」を多く用ゐる。

16 「日本音聲學」六七五頁には之と反對の意見が述べられてゐる。併し民謠等は、その方言のアクセントが混ずる現象はあるにしても、獨立の旋律を有するのが原則であると思ふ。（一番二番……と歌詞は違つても曲は同じだ。）山田耕作氏が作曲上アクセントに注意すべき事（圏點筆者）を述べてゐられると云ふが（「日本音聲學」六七六頁）、それは、普通作曲に際しアクセントの注意されないことを物語る。（同氏作曲の「からたちの花」は東京語のアクセントを非常に考慮に入れてゐる。）語り物等は歌謠よりは話言葉に近い故、アクセントを混ぜる割合が大きい。

## 第三章　一方言のアクセントの記述的研究

すべて、一方言の記述的研究は、その方言の前の時代の狀態及び他方言（近似せるものにしろ著しく相違せるものにしろ）とは全く無關係になさるべきものである。僅少であるとは云へ、その間に相違のある以上、ＡＢ二方言の記述に際し、Ａ方言を中心とし相違點に氣附いた場合にＢ方言に言及すると云ふ方法で、二方言の記述をすまし得たと思ふと、思はぬ誤りを犯すことがある。かゝる場合にも、ＡＢ各々獨立に研究して後に比較すると云ふ方法が理想的である。

國語に於ては、どの方言に於ても、[1]「文」を幾つかに切つて發音する事が出來ようと思ふ。例へば、東京語では、次の文は次の如く切つて發音する事が出來る。

夢中に｜なつて｜本を｜讀んで｜ゐたら｜大粒の｜雨が｜突然｜降りだしたので｜驚いた
　　　　　　　　　よんでたら

然るにこの横線以外の所で切ると、云ひ損じたとの感じを受ける。「ム｜チュー｜ニ」「ホン｜オ」「ヨンデ｜タラ」等。「夢中に」「本を」「驚いた」等の如く、それだけは必ず續けて發音されなければならぬ單位（文よりも下位の）を、橋本進吉先生は「文節」と名附けられた。[2]アクセントは大體この文節について定つてゐると云へる。[3]右に示した所でも明かなる如く、文節は文法書に云ふ「語」（單語）とは一致しない。その主なる違ひは、「助詞」「助動詞」が獨立に文節を形成する事なく、その前の「體言」「用言」と共に一文節をなす點である。

從つて、アクセントの觀察は、理論的には、文節を出發點とすべきである。[4]然るに東京語に於ては、「犬が」「いぬ

は」「いぬも」「いぬの」「いぬに」「いぬを」「いぬと」「いぬまで」等の文節から、「いぬ」の部分が容易に抽象される。(5)之を文法家は「語」と云ひ「名詞」と名附ける。語の中でも體言は單獨にても文節をなし得るから、之を出發點としてアクセントを觀察する事は出來る。併し單獨には文節を形成しない用言の活用形（例へば、「行か」「起きれ」等）については不可能である。又、文節內の現象と文節の連續する場合の現象とを混同してはいけない。例へば「道にまで」と「道にある」とは別に考へなければならぬ。「道+に+まで」「道+に+ある」或は「道に+まで」「道に+ある」として、兩者を同列に說くことはよくない。前者は一文節であり、後者は「道に｜ある」と二文節よりなる。

　文節を單獨に發音すると（それはさして不自然なことではない）、多くの方言では、その文節に固有の聲の高低關係のあることに氣附くであらう。それは、個人に於ては、同一條件の下の明瞭な發音に於ては、絕對の高さまでほゞ一定してゐる樣に思ふ。(6) この高低關係をその文節のアクセントの型（アクセント形式）と云ふ。音節數の同じい文節はすべて同じ型を有するとは限らない。多くは數種の型があり、音節數が增すほど型の數も多くなるのが普通である。例へば東京語では、二音節のものには（佐久間博士の表記法に從ふ）、

ウシ　イヌ　ネコ

の三つの型があり、三音節のものには、

サクラ　ツボミ　カキネ　ノギク

の四つの型がある。一方言にあらはれるあらゆる型について、どの部分がどの樣に高くどの部分がどの樣に低いかと云ふことを、卽ちその型の姿を、精密に記載することは、最初になすべき大切な仕事である。又强さに關する觀察も

忘れてはならない。耳による觀察の外に、機械による實驗も出來れば行ふ。（型の命名及び表記については後に述べる。）

文節は、一つ或はそれ以上の音節 syllable に分つ事が出來る。故に音節の數による文節の分類は勿論可能である。併し國語に於ては、それとは別の標準によつて分類した方が、アクセントの型の整理に好都合な場合が多い様だ。[7] 例へば東京語では、「バン」（番）、「コー」（甲）は一音節に發音される。「バ」と「ン」或は「コ」と「オ」の間に何等の切れ目も感ぜられない。然るに、之等を二單位よりなるものと見做して、二音節の「ネコ」と同列に取扱ふと、三者は皆同じ型を有するものと說明出來るが、さうしないと、一音節の文節には所謂「下型」「上型」の外に「下降型」があると說明しなければならず、甚だ複雜な結果を來たす。のみならず、「バン」「コー」を「ネコ」等と同樣二單位と見做す事は、普通人の考へ方とも一致するものである。和歌等に於ても、「ン」は一字に、長母音を含む音節は二字に數へられる。私はこの便宜上の單位を、適當な名稱がないので、「字」と呼ぶことにしてゐる。[8] 東京語に於ては、促音を一單位に數へる必要がない樣だけれども、私の方言ではその必要がある。この點については委しい說明を要するが、長くなるので略しなければならない。[9]

次に「語」を中心にして、文法家の分類に從ひ、「名詞・代名詞……」と順を追つて、それらの型について記述する事は、決して無意義ではない。その際、「助詞・助動詞」等の說明に於て、型相互の比較と云ふことに直面するであらう。それは型の姿の記述の際に當然なされた筈の事であるが、こゝでは別の方面より吟味することゝなるのだ。例へば、東京語で、「雀」「雀に」「雀にも」の各文節は、夫々「下中中型」「下中中中型」「下上上中型」と說明せられ。「スズ

メ、「スズメニ、「スズメニモ」と表記される（佐久間博士）。[10] 然るにこの三者をよく比較するならば、この表記法に大きい缺陷のある事を見出す。後二者に於て、「ズメニ」の部分の高さはほとんど變らずして、「モ」がそれ等よりずつと低い。[11] 高さの違はない部分を、「中中中」と「上上上」で區別し、高さの違ふ部分、即ち「雀に」の「ズメニ」と「雀にも」の「モ」とを、同じ「中」であらはしてゐる。「サンパツヤ」（散髪屋）と「コマモノヤ」（小間物屋）を比較しても同樣な缺陷を發見する。かくの如き觀察を進めて行くと、「サクラ」「ニワトリ」等の第二音節以下を「中」とすれば、「上」とすべきは、「ネコ」「コネコ」「カラス」等の高い音節、即ち一音節（實は「字」）卓立の場合の頂點のみではないかと思はれるのである。[12]

又、語を中心にして見ると、そのアクセントの變る如く思はれる場合がある。例へば、龜山方言で私の「下上型甲」[13]と呼んでゐるものに色んな助詞がつくと。

ハシ（箸）、ハシモ、ハシマデ、ハシガ、ハシニ

ハリ（針）、ハリモ、ハリマデ、ハリガ、ハリニ

即ち、「も、まで」がついた時には、「箸」「針」自身の音調が單獨の場合と大して變りがない樣に思はれるが、「が、に」等がつくと、「箸」「針」自身は全部低くなつて助詞だけが高くなる。この現象は規則的で例外がない。實は、右にあげた各文節に於ては型が一定してゐて動搖がないが、語を中心にして見ると、アクセントの規則的な交替があらはれる如く思はれるのである。か丶る點も充分考察して記述することは無意義ではない。例は多くないが、二三の方言では、語を中心にして見ると、音節間の高低關係が逆になる如く思はれる場合さへある。奈良縣吉野郡下北山村大字佐

田の上西敏雄氏の發音では、

アメ(飴)　アメガ　アメモ
ウシ(牛)　ウシガ　ウシモ
エダ(枝)　エダガ　エダモ

の様になる。一方、第二音節の高い名詞でこの様にならないものもある。

アミ(網)　アミガ　アミモ
イシ(石)　イシガ　イシモ
イヌ(犬)　イヌガ　イヌモ

兩者は別の型に屬してゐる。序に、氏の方言に於ける、二字の名字の今一つの型を示せば（型はこの三種に限る様である）、

アメ(雨)　アメガ　アメモ
イキ(息)　イキガ　イキモ
イタ(板)　イタガ　イタモ

和歌山縣東牟婁郡三里村上切原及び同郡本宮村の方言でも同種の現象を觀察した。鹿兒島縣大島郡喜界ケ島阿傳（東條操氏の「琉球方言」の領域に屬す）出身の岩倉市郎氏の發音に於ても（「ヌ」は「が」の意味の助詞）、

ファナ(鼻、花)　ファナヌ　　タル(樽)　タルヌ

の様である。〇〇は嚴密に云ふと、東京語の「下上型」より高く始まる様である。太い┃のついた部分は聲も高いが同時に割合に强い。

ファシ┃(橋、梯)　ファ┃シヌ┃　　ファ┃シ(箸)　ファ┃シヌ

ウミ┃(膿み)　ウ┃ミヌ┃　　ウ┃ミ(海)　ウ┃ミヌ

ヌミ┃(鑿)　ヌ┃ミヌ┃　　ヌ┃ミ(蚤)　ヌ┃ミヌ

次に文節と文節とが接續する場合に、而してそれらをつゞけざまに發音する場合に、いづれかの文節の音節間の高低關係に變化の起ることがある。その中の或ものは充分に規則的であつて、記述を必要とする。東京語で、「下中……型」十「下中……型」の連續は、續けざまに發音される限り、第二の文節が卓立の强調を受けない限り、普通「下中中……型」の如く發音される。

┃カネガ┃ナル(鐘が鳴る)

┃ヒノミノ┃カネガ(火の見の鐘が)

之等をアクセント記號通りに讀むと、小學校の子供の讀本朗讀の様になる。〔┃カネガナル、┃ヒノミノカネガ〕と云ふのが普通だ。龜山方言で、「下……上型甲」の文節は、次に來る文節が低く始まる時はアクセントの型をそのまゝ保存するが、高く始まる時は最後の音節まで低くなつて全體が低い平板的音調をとる。それは全く法則的である。

(一)　アル┃(或「下上型甲」)十アサ′(朝)＝アル┃アサ′

イトガ┃(糸が「下下上型甲」)十ナイ┃(無い)＝イトガ┃ナイ┃

カキカケノ(書きかけの「下下下下上型甲」)+テガミ(手紙)=カキカケノテガミ

## (二)

アル(或)+トキ(時)=アルトキ

イトガ(糸が)+ホシー(欲しい)=イトガホシー

カキカケノ(書きかけの)+ゲンコー(原稿)=カキカケノゲンコー

但し、(一)の場合の第二の山は非常に低くなる。前述の上西敏雄氏の發音では次の如きが觀察された。

ウシガ(牛が)+オル(居る)=ウシガオル

ウシガ(同)　+クル(來る)=ウシガクル

次に、相對的な高低關係は變らないが、單獨の場合とは姿の多少變化することがある。例へば東京語で、

ウシカ(牛が「下中中型」)+クル(來る「上中型」)

は、續けて發音する時には、而して「來る」を强調しない時には、「ウシガクル」とはならずに「ク」が「カ」と同じ高さで連なつて、

ウシガクル[14]

の様になるのが普通である。又、多くの方言に於て、アクセントの山のある文節が二つ連續すると、いづれの文節をも强調しない時には、第二の山の方が低くなる。例へば東京語で(佐久間博士の表記法による)、

アメガフル(雨が降る)

アタマガタカイ(頭が高い)

「フル」「タカイ」の山は著しく低い。但し之は、宮田幸一氏によれば次の如く表記される。(15)

a'mega + hu'ru = a'megahu'ru

a'tama'ga + ta'ka'i = a'tama'gataka'i

龜山方言では、第一文節が全然山のない「上上…型」であつても、第二文節が低く始まる限り、同様な現象が認められる。(16)

ウシガクル（牛が來る）

サキニオキル（先に起きる）

の「クル」「オキル」の山は著しく低い。

複合語のアクセントが、それを形成する單純語のアクセントと比較して、或は同一の接頭辭・接尾辭を含むものを互に比較して、考察されることがある。(17) 併し右に述べ來つた現象と、この際に認められる或種の一般的傾向とを同列に論ずることは出來ない。前者は全く法則的であるが、之には例外が少くない。複合語の中には、その形成要素と、それと曾ては同一であつた單純語とが、形が隨分違つて了つてゐる爲に、學者以外の人々には、關係づけて考へられないものがある。「ほのほ」（炎）の「ほ」と「ひ」（火）とを互に關係あるものと感ずる日本人は稀であらう。又、その關係が充分明瞭でも、アクセントに關して法則のないものがある。例へば、東京語で（神保格、常深千里兩氏著「國語發音アクセント辭典」〔厚生閣、昭和七年〕による）

テアテ（手當）　アテル（當）

テイレ（手入）　イレル（入）

テワケ(手分)　ワケル(分)

テナレ(手慣)　ナレル(慣)

この種のものは、深く研究をすゝめると、その間に興味ある法則の見出される事があるけれども、その方言の共時論的記述からは除外さるべきである。記述すべきは、複合語と單純語との關係が充分明瞭に感ぜられて居り、アクセントに關係する現象については、全く法則的にして例外がないか、或は例外は少々あつても非常に顯著な傾向があつて、新しい複合語を作る際に、定まつた規則に從ふものである。前者の例は、龜山方言の

トビノル(飛乗る)　トブ　ノル

ツギタス(繼足す)　ツグ　タス

ヒキヌク(引抜く)　ヒク　ヌク

ヌキトル(拔取る)　ヌク　トル

フミダス(踏出す)　フム　ダス

カイトル(買取る)　カウ　トル

カキタス(書足す)　カク　タス

フリヤム(降止む)　フル　ヤム

ウチワル(打割る)　ウツ　ワル

カミキル(噛切る)　カム　キル

オリトル|(折取る)　オル|　トル|
ハキダス|(吐出す)　ハク|　ダス|

の如きで、口語では全然聞かない様な文章語の複合動詞でも、この規則に從つて發音される。因みに東京語では前二群が「トビノル|、ヌキトル|」後二群が「カキタス、カミキル」となる。(18)

次にアクセント記號について述べよう。多くの方言を比較する場合と一方言について用ゐる場合とは別である。多くの方言を比較する場合には、型の姿の微妙な差異をあらはす爲に、出來るだけ精密なものを用ゐるのがよからう。併し型の姿は非常に複雜なものであるから、圖形的な記號であらはしつくす事は出來ないから、或程度の近似を以て滿足しなければならない。耳による觀察や、機械による實驗によつて得た高低曲線を以て補ふのがよい。一方言の記述に際し用ゐるべき記號については、次の點を考慮に入れなければならない。先づ第一に一方言に於ては型の數が無限にあるものではない。必ず比較的少數に限られてゐる。故に、之等の各々を別の記號を以て區別することは勿論必要條件であるけれども、あまりに精密過ぎて複雜を極めた記號を用ゐるには及ばない。型の姿については別に委しく說明して、記號はなるべく簡單なものを用ゐるがよいと思ふ。例へば龜山方言(京都・大阪の方言も同じ)では、二字の文節に四種の型があり、私は之を次の様に表記してゐる。

ソ|コ(底)　ソコ|(其處)　ネコ'(猫)　タ|コ(凧)

(「猫」は京都では「ネコ|」だから「ハル'」(春)の例と取換へればよい)然るに第四のものを「上下型」とするならば第一のものは「中中型」とすべきだとの反對が起るかもしれない。何となれば嚴密に云ふと「底」の「ソ」は「凧」の「タ」よりやゝ低

いからである。「其處」の「コ」も「凧」の「タ」よりやゝ低いから次の様に記號を變へて見る。

ソコ　ソコ　ネコ　タコ

この方言の三字以上の文節についても同じ主義で記號を定める。

カラダ[19]（體）　イロガミ（色紙）
ウサギ[19]（兎）　ニワトリ（鶏）
チカメ（近眼）　クロンボ（黒ん坊）
タムシ（頭癬）　ノミモノ（飲物）
カラス（烏）　オヤネコ（親猫）
デンキ（電氣）　ウエシタ（上下）
アサバン（朝晩）
オーカミ（狼）

然るにかくの如く三段式記號を使つても充分に精密とは云へない。例へば、嚴密に云ふと「親猫」の「オ」は「ヤ」よりはやゝ低く、「コ」は「オ」より低い様だ。「底」の「ソ」（中）は「凧」の「タ」（上）と「其處」の「ソ」（下）の中間と云ふよりは前者（タ）の方に近い。外にも問題はいくらでもある。のみならず、右の表に於て「上」になつてゐる部分は「一字」の卓立せる型のみに見出される。而して、○○○の外に○○○の如き型もなければ、○○○の外に○○○の如き型もない。故に、型の姿の委しい説明は別にして、次の如き記號を用ゐた方が遙かに勝れてゐることがわかる。

カラダ　　イロガミ
ウサギ　　ニワトリ
チカメ　　クロンボ
タムシ　　ノミモノ
カラス　　オヤネコ
デンキ　　ウエシタ
　　　　　アサバン
　　　　オーカミ

又この記號が、型の姿から非常に遠いものでは決してなく、概略的にはよく示し得てゐることもつけ加へて置かう。

東京語に於ても、「日本音聲學」や「アクセント辭典」の記號は、右の如き見地からの批評の餘地があると思ふ。

　次に前述の語を中心にして見た文節內の現象も考慮に入れる必要がある。語の中體言は常に同一の形を有すると考へられがちであるから、型の姿に僅かの差が生ずるに過ぎないならば、なるべく同じアクセント記號をつけることが望ましい。龜山方言の〔ソコ〕（其處）と〔ソコモ〕（其處も）とは右の三段式記號によれば、〔ソコ〕〔ソコモ〕となるわけだが、實際「も」がつくと〔コ〕がやゝ高くなるにしても、私の記號の方が勝れてゐる。東京語で「牛」「牛まで」は佐久間博士により〔ウシ〕〔ウシマデ〕と表記されるが、之を〔ウシ〕〔ウシマデ〕（「下上型」をどう表すかは別問題である）と表すのと、どちらがよいかは、輕々しく論ずる事が出來ない。

　次に文節と文節とが連續する場合の現象も考慮に入れなければならない。東京語に於て、前述の如く、「ウシカ」＋「クル」は「ウシガクル」の樣になる。「牛が」を「ウシガ」、「來る」を「クル」と表はした方が、「ウシガクル」となつて便利かも知れない。龜山方言に於て、「下……上型甲」の文節は、前述の如きアクセントの變化を示す。

アル(或)＋トキ(時)＝アルトキ

アル(或)＋クニ(國)＝アルクニ

三段觀によらずに二段觀によつて、「次に來る文節が高く始まる時に……」と說明した方が便利だ。
一方言のアクセントの記述には、以上の諸點を考慮に入れて、なるべく簡明な記號を採用した方がよいと思ふのである。

　かくして定めた記號に從つて型に命名することが普通行はれてゐる。アクセントの說明に際し便宜が多いからである。高い部分と低い部分を示すのみならば、その記號は「二段式」と呼ばれ、そのアクセント形式觀は「二段觀」と云はれる。この場合、高い部分を「上」或は「高」、低い部分を「下」或は「低」として型に命名する。「上上型」「下上型」等。上中下の三段階を示すは三段式であつて、型の命名法は同樣である。四段式・五段式等も可能であるが、國語に於ては、それほど複雜な記號の必要な方言はなささうに思ふ。

　上述の如き色々の點に關する記述がすんだならば、理想としてはアクセント辭典を作りたい。之を以てその方言のアクセントの記述的な研究が完成する。アクセント辭典編纂について注意すべきは、その方言で用ゐられるあらゆる

單語を網羅すべき事である。その方言特有の單語ばかりでは勿論いけない。普通語のと同じ形の單語も記載しなければならぬ。女子・老人・農夫等使用者の限られてゐる單語、使用の稀なもの、新しく標準語よりはひつた事の明かなもの等々に註を入れることなど、方言辭書編纂に關する注意はすべてこの場合にもあてはまる。其他、同一語に二種類(或はそれ以上)のアクセントのある時には、意味の差異・使用者の相違があれば、註記すべきである。(20)

なほ、東京語には次の如き現象がある。有坂秀世君が、御自身のアクセントについて發見せられたのである。

(1) 一音節語の中で「日」(day)は、單獨にあらはれる場合には「毛」「血」(所謂「下型」)と同型になるけれど、「ソノヒノ」「アノヒニ」のやうに前に修飾語がつくと「手」「目」(所謂「上型」)等と同型になる。

(2) 二音節語の中で「人」「上」「下」「家」は、單獨にあらはれる場合には、「牛」「鳥」等と同型になるけれど、「アノヒトニ」「キクヒトガ」のやうに前に修飾語がつくと「馬」「山」等と同型になる。(21)

かくの如き現象は、他の方言ではまだ發見されてゐない様だ。之等は孤立的な斷片的な事實で、辭書の中に記載さるべきものではあるが、言語史的に見て重要なものであるから、まとめて別の場所に記して置いた方が便利であると思ふ。

尙、最後に附言したい事は、文章語のアクセントについてゞある。文章語のアクセントに注意した學者は割合に少いが、(22)之に全然觸れない事はよくない。或地方で文章語を全然朗讀しないと云ふ事も稀であらうし、文章語をどんな音調でよんでもよいと云ふ事もなからう。文章語の朗讀に一定のアクセントのある事は方々の方言で觀察される樣で

あり、地的方な差異も大いに認められる。東京と近畿とで非常に違つてゐる。最も確かなアクセントの認められるのは、用言の色々な活用形である。「起きる」「受ける」に對する「起く」「受く」、「暑い」「白い」に對する「暑し」「白し」等。之等は例へば東京と龜山で次の如く相違してゐる。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 東京 | オク | ウク | アツシ | シロシ |
| 龜山 | オク | ウク | アツシ | シロシ |

之等は口語形のアクセントと密接な關係をもつてゐる。例へば龜山方言では右の動詞は

| 口語 | | 文章語 |
|---|---|---|
| ○○○(例へば「アケル」開) | …… | ○○(例へば「アク」) |
| ○○○(〃「オキル」起) | …… | ○○(〃「オク」) |

の如き關係があり、口語のアクセントより文章語形のそれが類推される。故に、文章語の形としては全然きいた事がなくても、相當する口語形のアクセントを知つてゐるならば發音出來る。併し各個人がかゝる類推が出來る樣になるには、文章語の形そのもののアクセントを何度もきかなければならない筈である。即ち、之等のアクセントも口語のと同樣傳承にもとづくものである。併し乍ら、相當する形の口語にない場合には類推がきかないから、文章語の形の發音されるのをきかなければならない。從つてこの種の語には、アクセントの一定してゐるものもあるけれども、個人差の甚しいものが多い。(3) 名詞等だと、普通口語からの類推がきかないから、この種の動詞と同樣な狀態である。かゝる單語についての記載は、多くの個人についての觀察をもとゝしなければならない。

註

1　勿論全部が調査ずみではない。

2　岩波講座日本文學「國語學概論(上)」一八頁以下。

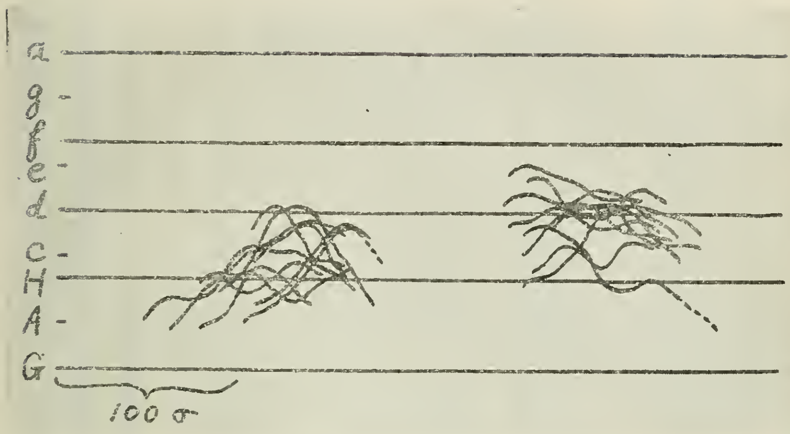
3　龜山方言では、精密に云ふと、更に下位の單位(「語」とは一致しない)について定まつてゐると云ふべきものの様である。

4　「吾々は文で話すのであつて語で話すのではない」との見解から、文の觀察から出發すべきだと說く人もある。甚しきは、單語について實驗して得た高低曲線を全然無價値だと云つた人さへあつた。併しそれは不當である。なるほど吾々は文を聞く事が多く語をきく事は稀である。併し吾々の記憶に殘つて言語表象を形作るのは、文ではなくしてそれを分解して得た語(或は文節)である。然も、音聲表象として殘るのは、不明瞭に發音され不充分に注意された文節の音聲印象に非ずして、明瞭に發音され聽者にも充分注意された文節の音聲印象である(有坂秀世君「音聲の認識について」前出)。故に、理想的には、文中の明瞭に型の姿のあらはれる文節について觀察すべきであらう。單獨に明瞭に發音された文節は之に非常に近い姿を示す故に、之について觀察を始める事も不當ではない。

從つて、長い文の高低曲線をとつて、それに「おのづから中位の高さがあつて、これより高い方への上昇、及びこれより低い方への下降の二方向への變化が營まれてゐる」故に、東京語のアクセント三段觀がその事實によつて支持されるとする說(佐久間鼎氏「國語の發音とアクセント」〔同文館、大正八〕二五二—三頁)には同意出來ない。

5　常に「イナー」(犬は)と發音される様になるとこの種の分解は不可能になる。琉球首里附近の方言にかゝる例がある。

6　この點については異論があるかも知れないが、私はその様に觀察する。嚴密な實驗が望ましい。鄉里の龜山町出身の柴田英生氏について、昭和五年五月、東京帝國大學文學部心理學實驗室に於て次の實驗を試み得た。實驗機械は、Krüger-Wirth の Kehltonschreiber と一秒百回の複振動をなす電氣音叉、Marey の tambour 及び Kymograph 等。〔アサ〕(朝、

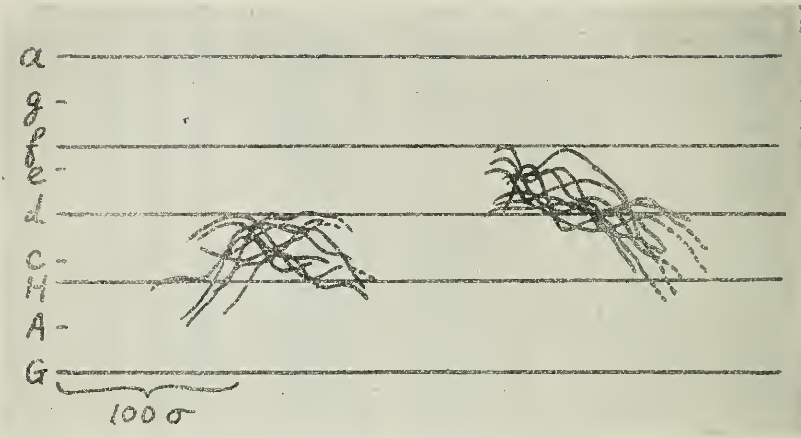



第一圖　〔アサ〕「麻」

第一圖）と〔アサ〕（朝、第二圖）を夫々十回と九回發音してもらつた。發音は明瞭にと注文してあつたが、中には不明瞭になつたのが耳でも觀察されたし、實驗の結果にもあらはれてゐる。併し、大體に於てかなり一定せんとする傾向が見える。第二圖に於いて一層著しい。この語に於ては、表記法の如く、第二音節〔サ〕の母音自身が下降的音調を有することが耳によつて觀察されるが、實驗の結果にも、ほゞ fd→dH と云ふ一致した下降的傾向を認める事が出來る。

女子や子供と成年の男子とでは、絶對の高さが明かに違ふ。それにも係らず、全く同じ型と認められるのはどう云ふ客觀的事實が存する爲であるかを研究するのは興味があらう。〔カタ〕（肩、東京語）と云ふ樣な語で、第一音節の母音と第二音節のそれとの絶對的高度の關係が、同一方言を話す男子・女子・子供等でどうなつてゐるか等と云ふ點を、精密な機械によつて實驗したら面白いであらう。

7　沖繩縣國頭郡今歸仁字與那峯出身の仲宗根政善君の方言では、長母音・二重母音・「母音＋ン」を含む音節も單母音を含む音節




第二圖　〔アサ〕「朝」

と同様一單位として取扱つた方が便利の樣である。首里・那覇の方言については、大濱政和氏「琉球語の單語を凝視して」(音聲學協會會報29—30號)參照。

8 之を「音節」と呼べば Syllable に對しては別の譯語を要する。音聲學に云ふ Syllable は之とは別のものである。母音が如何に長く引かれても、强さや高さの谷が出來ない限り、音聲學上では一つの Syllable を形成する。

9 母音の無聲化や脫落についても說くべきことは多いが略する

10 宮田幸一氏の例を拜借する。「音聲の研究」Ⅲ(昭和五)二五六頁。もしも博士が「ス|ズメニ|モ」と表記されるならば(その疑はないでもない。「日本音聲學」五五〇頁十一行以下比較。)同一の型に對し二種類の表記法を用ゐることになる。「雀にも」と「小屋間物」「コ|マモノヤ」とが全然同じ型に屬する事は東京人なる有坂秀世君によつて明言されてゐる。非東京人なる私が觀察してもその樣に思ふ。

11 「音聲の研究」Ⅲ二五三頁二〇行以下比較。有坂秀世君も同意見である。「スズメニ」の「ズメニ」より「スズメニモ」の「ズメニ」

の方が誤つて高く感ぜられることのあるのは、低い「モ」との對比によるのではないかと思ふ。機械による精密な實驗が望ましい。

12 又、所謂「下中型」（飴）と「上中型」（雨）との第二音節は同じ高さ（中）とは認められない。後者の方がずつと低い。博士の示された高低曲線もそのことを物語つてゐる。博士が「上中型」についてのみ、「こゑとめ」Stimmabsatz の前にあらはれる聲の低下を問題にせられる（日本音聲學、四一五頁）のは諒解に苦しむ。「鷄」「ニワトリ」と「蝙蝠」「コーモリ」との「中」とされてゐる部分も後者の方がずつと低い。

13 龜山方言の型の名稱については、「方言」一ノ一の拙稿一五頁以下參照。

14 之を「ウシカクル」或は「ウシカクル」等と表記して注意を加へずに置くと、近畿人等は非常に違つた發音をする懼れがある。

15 同時に表記法の如く、第二文節では聲の下降ばかりあらはれると觀察されてゐる（音聲の研究Ⅰ一八頁以下）。有坂秀世君も同意見である。

16 二八頁五行參照。

17 例へば「日本音聲學」第十六章四八。

18 山田武太郎（美妙）は「日本大辭書」（明治二十五年第一版）の附錄「日本音調論」に於て、この點に關する委しい觀察をなしてゐる。「トビノル」「カミキル」等は佐久間博士の「式保存」とは逆の關係を示す。「飛ぶ」「乘る」は共に平板式、「嚙む」「切る」は共に起伏式である。

19 京阪地方の方言のアクセントを示すに、「カラダ、ウサギ」の如き表記法の用ゐられることがあるが、之は許すべからざ

る缺陷を藏する。〔ウサギ〕（或は〔スズメ〕）は明瞭に〔カラダ〕より低く始まる。

20 龜山方言には、「起きる」に〔オキル、オキル、オキル〕と三種のアクセントがあり、第二のものが普通に用ゐられ、第一のものは老人に、第三のものは子供に多いと云へよう。方言一ノ四の拙稿一三頁參照。

21 有坂君に從ふと、三音節語の「所（ところ）」も之等と同樣に、單獨の時は所謂「下中中型」、修飾語がつくと「下上上型」になる。接續詞的に使ふ「所が」は〔トコロガ〕だが、「……した所が」といふべきものを略したものだからだらうとの事である。

22 山田武太郎の「日本音調論」（前出）には東京語に於ける、井上奧本氏「舞鶴地方のアクセント」（音聲の研究Ⅲ）には同氏の方言に於ける、文章語のアクセントが記述されてゐる。

23 神保格教授の「アクセント不確」である。「國語讀本の發音とアクセント」（厚生閣書店、昭和五）の「本書の解說」一一頁。

## 第四章　諸方言のアクセントの比較研究

二つ以上の方言のアクセントの比較研究には二つの行き方がある。その一つは音聲學的である。文節の意味から全然離れて、たゞ音聲現象のみを比較する。型の姿、文中に於けるその實現のされ方、文節が連接する場合におこる變化、强調との關係など、第二章及び第三章に述べた種々の現象について比較研究をする。東京方言の〔ノミ〕（鑿）と京都方言の〔ノミ〕（蚤）とは型の姿が非常に似てゐる。東京の〔ハシ〕（端）と京都の〔ハシ〕（箸）とはやゝ違ふ、など云ふはこの種の比較である。

他は言語史的である。この場合には、語の音韻と意味とが常に關係づけて考へられ、語からはなれてアクセントの型が問題とならずして或語が如何なる型をとるかと云ふ點に注意が集中する。

二つの方言が、音韻・意味の點に於て相違してゐるならば、兩者が同一の祖語からわかれて年代のたつたことを示す。祖語に於て同一の語であつたものが、兩方言或はいづれかの方言に於て、その音韻或は意味或は兩者が、時代の經過と共に變じた爲に、かくの如き相違が生じたのである。而して、かくの如き變遷が生ずる場合に、それを攪亂する力の妨げない部分に於ては、音韻はきはめて規則的に變遷すると云ふのが、歐米の學界に於ける定說である。

二つの方言を比較して、同じ意味或は近い意味を有する語に於て、A方言の〔h〕なる音韻がB方言の〔p〕なる音韻に規則的に對應することを發見したとする。すると、祖語の音韻（x）がA方言では〔h〕によつて、B方言では〔p〕によつて代表されてゐる事がわかる。かくの如き音韻對應の規則を、言語學で「音韻法則」Lautgesetz と云ふ。(1)

アクセントの型も音韻と同等のものであるから（廣義の「音韻」の中に含まるべきである）、同樣な「法則」が見出されるわけである。國語の諸方言に於てもアクセントの型の對應の規則が見出される。(2) かくの如き「法則」を見出さんとする目的を以て、比較研究を行ふことが出來るのである。

かゝる研究に於て注意すべき事を述べよう。右に說いた所によつて旣に明かである如く、比較さるべき語は、各方言に於て、祖語より直接受繼いだものでなければならない。祖語から分裂した後に他の言語より輸入した語や、(3) 他の方言よりとり入れた語は、除外しなければならない。かゝる意味で、琉球方言と本州方言とを比較する場合には漢語を除外すべきである。(4) 本州方言内の比較に於ては、事情が複雑だから簡單には云へないが、少くとも別にして考察し

た方が安全だと思ふ。近畿方言・中部地方方言・關東方言等の如く、地續きの地域に行はれて居り、古來より交通の盛んに行はれた地方の方言を比較する場合になると、單語の貸借[5]の甚しかつた事が想像されるにも係らず、その關係を明かにすべき望みはきはめて少い。故にこの場合には比較研究が非常に困難だと云ふことになる。併し乍ら、實際に比較して見ると、日常生活に關係深く頻繁に用ゐられる根本的な單語(殊に動詞)に於ては、隨分明瞭な型の對應關係が見出される。[6] 私はこの事實が、根本的な單語は貸借されることが比較的少かつた事を意味するものと解釋したいのである。これに反し、型の對應の例外となる語は、他方言より輸入(廣義)されたとの疑ひが濃厚であらう。

次に、類推によつてアクセントの變化することがある。東京語の「オチル(落)、ウケル(受)、カケル(掛)、タテル(立)」等は、龜山方言では普通「オチル、ウケル、カケル、タテル」だから、この場合には、東京語の「下上中型」に龜山方言の「下上下型」が當る樣に思はれる。然るに、この方言には老人的な發音に、「オチル、ウケル、……」と云ふアクセントがあり、近畿アクセントの歴史的研究や土佐方言と比較すると、東京語の「下上中型」に對應するものは右の「上下下型」で、「下上下型」は他の活用形に類推して出來た形であることを知る。[7] 東京語で疑問をあらはす語は第一字がすべて高い。「ダレ、ドレ、ナニ、ドコ、イツ、ドー、ナゼ」等。龜山方言では「ダレ、ドレ、ナニ、ドコ、イツ、ドー、ナゼ」である。龜山方言で平板型の語は恐らく東京語でも平板式だつたのであらうが、その他のものが第一音節に頂點があるのに類推してかく變化したものと考へられる。

又、方言によつては、音節の構造や種類によつて或種の單語の型がかはる事がある。かゝる場合にも、出來るならば、元の型を明かにしなければならない。例へば、東京語では、「カエル(歸)、カエス(返)、トール(通)、トース

(通)」であるが、同じ系統のアクセントを有する他の方言の形と比較すると、「カエル、カエス、トオル、トオス」と云ふのが古い形で、東京語の今日のアクセントは、之等の語が二重母音・長母音を含むやうになつたために出來たのだと考へられる。(中部地方・中國地方の或方言ではこの様なアクセントを保存してゐる。)大原孝道氏によると、(8) 島根縣松江の方言では、「イ列音、ウ列音」はアクセントの型に特殊の影響を與へる。氏の表記法に從ふと、

| | | |
|---|---|---|
| イタイ(痛) | イタカッタ | |
| サムイ(寒) | サムカッタ | |
| オモイ(重) | オモカッタ | |
| カルイ(輕) | カルカッタ | |
| カマ(鎌) | カマガ | カマモ |
| ホネ(骨) | ホネガ | ホネモ |
| ウミ(海) | ウミガ | ウミモ |
| アミ(網) | アミガ | アミモ |
| カゼ(風) | カゼガ | カゼモ |
| ハナ(鼻) | ハナガ | ハナモ |
| ウシ(牛) | ウシガ | ウシモ |
| クビ(首) | クビガ | クビモ |

母音の無聲化のためにアクセントの頂點のずれることがある。か丶る現象にも注意しなければならない。

第二章に述べた如く、誇張の强調によつてアクセントの變化する(卽ち一時的ではなく)事がある。かくして出來たアクセントは除外し、古いアクセントが同時に行はれてゐるならば、その方をとらねばならぬ。

右にも少し觸れた如く、歴史的研究によらなければ、右に述べた諸點を明かにし得ないことがある。又之によつてその方言のアクセントの型の變遷(單語のアクセントの孤立的な變化に非ずして)を明かになし得る場合もある。故に可能なる限り歴史的研究を試みなければならぬ。併し實際に於ては、國語のアクセントの史的研究が、近畿方言に於てのみ可能らしきは、殘念な次第である。歴史的研究法については近く別の場所で詳說することになつてゐるから、今は省略に從ひたい。

本州方言內での比較研究に於ては、それほど例が多くない樣だが、琉球方言と本州方言とを比較すると、語原の同じ語にして意味までかなり相違してゐるものがある。か丶るものは音韻法則とアクセントの法則によつて同一語原なることが證明出來、逆に意味の變遷に關する考察に參考となることがある。沖繩縣國頭郡今歸仁字與那嶺方言で「突く」の意味の動詞は〔nutʃuŋ〕、「拔く」の意味のは〔nuʃuŋ〕である。音韻法則とアクセントの法則は、前者は東京語の「拔く」に、後者は「脫ぐ」に當る動詞なる事を證して、一點の疑ひをも許さない。併し、かくの如き場合には、兩者の同一性を認める迄に時間のか丶ることがある。

右の比較研究は、第二章に述べた如き完全な記述的研究の出來てゐる方言相互の間に於てするのが理想であるけれども、多くの方言を比較する場合には、各方言に於て完全な記述を得ることは望み難い。又、後世に發達した單語の

アクセントに關する知識は、かゝる比較研究には必要でない。故に、なるべくひろく各方言に於て祖語からそのまゝ受繼いだ形で使用されてゐる比較的少數の語を選び、それ等の語の各方言に於ける型を比較するのが簡便である。祖語から受繼いだ形の生存せる地理的範圍の狹い語、或は、柳田國男氏のお使ひになつてゐる術語を拜借すれば「方言量」(9)の非常に多い語、については、諸方言のアクセントの比較研究は不可能である。言語地理學的に調査する場合にも限られた數の單語によらなければならぬ故、この點を考慮に入れて單語を選ばなければならない。卷末に、私の乏しい經驗からこの種の研究に持出さるべき單語であると考へるものの表を添へて、方言調査者の御參考に供したい。それ等は私の知る本州方言に於ても生きて居り琉球方言にも存するものを選んだのであるが、九州・東北其他の方言に於ては使用されないものがあるであらう。大方の御指敎を仰ぎたい。なほ、これだけの語のアクセントを知り得たならば、その方言のアクセントの系統について、大體の概念が得られようと思ふ。

上述の如き言語史的比較研究を進めて行くと、對應する型の姿がほんの少し相違してゐるに過ぎない場合もあれば非常に違つてゐる場合もある事を見出すであらう。私の今までの經驗では、本州方言には多種多樣のアクセントがあるけれども、之を二大別することが出來る樣に思ふ。その各〻の中には、色〻の變種が認められるが、兩者間の著しい相違點は嚴然と保存されてゐる。(この點は、昨夏大和吉野地方及び熊野地方の方言を調査した際に、一層痛感した。今こゝに委しく說明する暇のないのは遺憾である。)この二種のアクセントは、一般には、「關東のアクセント・關西のアクセント」と云ふ漠然とした名稱で呼ばれてゐるが、實はその分布が複雜を極めてゐるのである。今「關東のアク

セント」の代表として東京語のそれを選び、「關西のアクセント」の代表者たる近畿アクセントと系統を同じうし且つ一層古形を保存する高知のアクセントと比較しよう。後者は高知縣土佐郡一宮村（高知市郊外）出身の山本正秀氏の發音による[10]。

一字の名詞。高知（と略稱することにする）には三つの型がある。助詞「が」がついた場合に、(一)名詞と助詞とほゞ同じ高さで共に比較的高くなるもの。カガ（蚊が）(二)名詞が低く助詞が高くなるもの。ナガ（菜が）(三)名詞が高く助詞が低くなるもの。ナガ（名が）東京には二種の型がある。「下型」と「上型」（型の名稱及び表記法はすべて佐久間博士に從ふ）。型の對應は、高知の(一)の型は東京の「下型」に、(二)の型は「上型」にあたる。(三)の型に屬する語は、東京では「下型」「上型」兩方になつてゐる。

| | 蚊 | 血 | 名 | 餌 | 木 | 根 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | カガ | チガ | ナガ | エガ | キガ | ネガ |
| 東京 | カか | チか | ナか | エか | キか | ネか |

二字の名詞。高知には四つの型がある。(一)第一字と第二字とほゞ同じ高さで共に比較的高いもの。助詞「が」はほゞ同じ高さで續いて全く平板的な文節を形作る。アメ（飴）アメガ。(二)第一字が低く第二字が高い。助詞「が」は第二字よりやゝ高く連なり、「下中上型」の樣な文節を形作るが、第二字はむしろ上に近く、概略的に次の如く表記する。アト（跡）アトガ。名詞が長母音語なるときは、むしろ キョーガ（今日が）に近くなる。(三)第一字が低く第二字が高い（第二字は二のよりやゝ高い）。助詞「が」がつくと「下上下型」の文節を形作る。アキ（秋）アキガ。(四)第一字が高く第二

字が低い。助詞「が」も低く續く。アシ（足）アシガ。之等を各〻次の如く呼ぶことゝする。(一)上上型、(二)下上型甲、(三)下上型乙、(四)上下型。東京には「下中・上中・下上」の三つの型がある。型の對應は、

| 高知 | | 東京 |
|---|---|---|
| 上上型 | …… | 下中型 |
| 下上型甲 | } …… | 上中型 |
| 下上型乙 | | |
| 上下型 | …… | 下上型 |

語例を示すと、

| 高知 | | 東京 |
|---|---|---|
| アメガ（飴）、ウシガ（牛）、エダガ（枝） | …… | アメか、ウシか、エダガ |
| アトガ（跡）、イキガ（息）、ウミガ（海） | …… | アトか、イキか、ウミガ |
| アキガ（秋）、アメガ（雨）、オケガ（桶） | …… | アキガ、アメガ、オケガ |
| アシガ（足）、イヌガ（犬）、ウタガ（歌） | …… | アシガ、イヌガ、ウタガ |

三字の名詞。三百六十語について調査した所によると、高知には五つの型がある。概略的に表記すれば、(一)アイダ（間）、(二)アヤメ（菖蒲）、(三)アタマ（頭）、(四)オモヤ（母屋）、(五)アサヒ（朝日）。之等を次の如くよぶことゝしよう。(一)上

上上型、(二)下上上型、(三)上上下型、(四)下上下型、(五)上下下型。東京語には「下中中・上中中・下上中・下上上」の四つの型がある。型の對應關係は、例外の語が一層多くなるので、明瞭にはわからない。「上上上型・下上上型」の語は、大部分が「下中中型」に、「上上下型」の語は約三分の二が「下上上型」になつてゐる。然るに「下上下型」及び「上下下型」の語は次の樣である。

| | | |
|---|---|---|
| 下上下型、五六語 | 下中中型 | 二〇語 |
| | 上中中型 | 一九語 |
| | 下上中型 | 二語 |
| | 下上上型 | 一五語 |
| 上下下型、六一語 | 下中中型 | 一四語 |
| | 上中中型 | 二一語 |
| | 下上中型 | 一五語 |
| | 下上上型 | 一一語 |

となつてゐて混沌たる狀態である。之は、山田美妙の「日本大辭書」の中より、和語にして比較的よく用ゐるものを、ずつと以前に無標準にかきぬいて置いたものについての統計であるから、前述の如き色々な觀點から吟味を要するであらう。東京語のと同系統のアクセントを有する廣島縣安佐郡中原村字中野(澤野武馬氏)の方言について調べ得た語と比較すると(便宜上この方言の型の名稱は東京語のと同じものを用ゐる。語例が少くなつてゐるのは、鹿兒島縣大島

郡喜界ケ島阿傳方言に於て見出されないものを多く省いたからである。）

| | | 中原 | 東京 |
|---|---|---|---|
| 下上下型、二四語 | 下中中型 | 一三 | 一一 |
| | 上中中型 | 八 | 一〇 |
| | 下上中型 | 三 | 一 |
| | 下上上型 | 〇 | 二 |
| 上下下型、二一語 | 下中中型 | 八 | 七 |
| | 上中中型 | 〇 | 六 |
| | 下上中型 | 一二 | 三 |
| | 下上上型 | 一 | 五 |

「上下下型」の語に中原方言で「下上中型」になつてゐるものの多いのが目立つ。東京中原兩方言とも、「下中中型」の語の多いのが注意される。動詞や形容詞の場合より類推すると、高知の「上下下型」は東京の「下上中型」に對應するものの様である。(11) 語例を少しあげる。

| 高知 | | 東京 |
|---|---|---|
| カタチ | 形 | カタチ |
| サクラ | 櫻 | サクラ |

| | | |
|---|---|---|
| クルマ | 車 | クルマ |
| ウサギ | 兎 | ウサギ |
| ハダカ | 裸 | ハダカ |
| カガミ | 鏡 | カガミ |
| カタナ | 刀 | カタナ |
| カムト | 兜 | カブト |
| ムカシ | 昔 | ムカシ |
| ココロ | 心 | ココロ |
| チカラ | 力 | チカラ |

二字の動詞。高知では、上上型か下上型甲かに屬する。〔オル〕（居）の一語のみが上下型である。東京には「下中・上中」の二種の型がある。上上型が下中型に、下上型甲が上中型に對應する。語例を擧げる。

| | 賣 | 置 | 飛 | 乘 | 書 | 指 | 飲 | 讀 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | ウル | オク | トブ | ノル | カク | サス | ノム | ヨム |
| 東京 | ウル | オク | トブ | ノル | カク | サス | ノム | ヨム |

三字口語一段活用動詞（文章語形で二字のもの）。高知には「上上上・上下下」の二種、東京には「下中中・下上中」の二種の型があり夫々對應してゐる。例外はごく少い。

| | 當 | 止 | 載 | 燒 | 落 | 受 | 掛 | 立 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | アテル | トメル | ノセル | ヤケル | オチル | ウケル | カケル | タテル |
| 東京 | アテル | トメル | ノセル | ヤケル | オチル | ウケル | カケル | タテル |

三字四段活用動詞。高知では、大部分の動詞が上上上型か上下下型かに屬する。「アソブ（遊）、アルク（歩）、カクス（匿）」は下上上型であるが、この三語は近畿方言に於ても「アソブ（アスブ）、アルク、カクス」と下下上型甲になつてゐる。東京では「アソブ、アルク、カクス」である。三字四段活用動詞は東京では大體「下中中・下上中」のいづれかに屬する。「歸る、返す、通る、通す(12)、申す、這入る、參る」は上中中型である。型の對應は、上上上型と下中中型、上下下型と下上中型である。

| | 當 | 威 | 飾 | 殺 | 餘 | 怒 | 曇 | 頼 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | アタル | オドス | カザル | コロス | アマル | オコル | クモル | タノム |
| 東京 | アタル | オドス | カザル | コロス | アマル | オコル | クモル | タノム |

四字口語一段活用動詞。高知では上上上上型・上上下下型・下上上上型（と呼ぶことにしよう）に屬する。最後の型に屬するものは、龜山方言でも下下下上型甲になつてゐるが、十語足らずに過ぎない。この少數の動詞は、東京語では下中中中型か下上上中型かになつてゐる。高知の上上上上型・上上下下型に對應する東京の型は夫々下中中中型・下上上中型である。

| | 重 | 忘 | 聞 | 數 | 覺 | 離 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | カサネル | ワスレル | キコエル | カズエル | オボエル | ハナレル |
| 東京 | カサネル | ワスレル | キコエル | カヅエル | オボエル | ハナレル |

三字の形容詞。高知では上上下型或は上下下型に屬する。東京では下中中型か下上中型。上上下型と下中中型、上下下型と下上中型が夫々對應する。

| | 厚 | 甘 | 赤 | 暑 | 辛 | 白 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高知 | アツイ | アマイ | アカイ | アツイ | カライ | シロイ |
| 東京 | アツイ | アマイ | アカイ | アツイ | カライ | シロイ |

上述の東京及び高知のアクセントが、あらゆる點に於て古形を保つてゐるとは考へられない。右に擧げた用言の終止形(それは古への連體形。一段活用動詞のは同じ動詞の他の活用形の類推により變化したものだが、アクセントの型は連體形のそれを受繼いだものと思ふ)の中殊に平板的のものは色々の點で疑問が存し、研究の餘地がある。又、東京語では平板式の名詞と同じ高さで助詞「も、へ」が續いて全體で平板的な文節を形成するけれども、東京語と同じ系統のアクセントを有する大和十津川方言[13]に於ける如く、「も、へ」の低く續くのが古形であらう(系統は違ふが近畿方言に於てもさうである)。

用言の活用形に於ても型の對應關係が見られるが、東京語では平板式のものに著しい平板化が起つた爲に古いアクセントが失はれた様に思ふ。左に、東京・十津川・高知の三つの方言を比較するが、東京と十津川と相違せるは、後者

の方が古形を保存してゐる爲であると思ふ(勿論アクセントの型についてのみ)。

| | 東京 | 十津川 | 高知 |
|---|---|---|---|
| 置 | オイタ | オイタ | オイタ |
| 飛 | トンダ | トオダ | トーダ |
| 呼 | ヨンダ | ヨオダ | ヨーダ |
| 當 | アテタ | アテタ | アテタ |
| 止 | トメタ | トメタ | トメタ |
| 載 | ノセタ | ノセタ | ノセタ |
| 威 | オドシタ | オドイタ | オドシタ<br>オドイタ(無教育者) |
| 殺 | コロシタ | コロイタ | コロシタ<br>コロイタ(無教育者) |
| 結 | ムスンダ | ムスンダ<br>ムスーダ | ムスンダ<br>ムスーダ |
| 重 | カサネタ | カサネタ | カサネタ |
| 忘 | ワスレタ | ワスレタ | ワスレタ |
| 聞 | キコエタ | キコエタ | キコエタ |

右は、東京語で所謂平板式の動詞であるが、起伏式のものは、東京と十津川と型が全く一致してゐる。

| | 東京 | 十津川 | 高知 |
|---|---|---|---|
| 書 | カイタ | カータ | カイタ |
| 飲 | ノンダ | ノーダ | ノオダ |
| 讀 | ヨンダ | ヨーダ | ヨオダ |
| 受 | ウケタ | ウケタ | ウケタ |
| 掛 | カケタ | カケタ | カケタ |
| 立 | タテタ | タテタ | タテタ |
| 怒 | オコッタ | オコッタ | オコッタ |
| 急 | イソイダ | イソイダ | イソイダ |
| 頼 | タノンダ | タノーダ | タノーダ |
| 數 | カゾエタ | カゾエタ | カズエタ |
| 覺 | オボエタ | オボエタ | オボエタ |
| 離 | ハナレタ | ハナレタ | ハナレタ |

高知方言の〔カイタ、ノオダ、ヨオダ〕は、近畿方言で〔カイタ、ノンダ、ヨンダ〕となつてゐるものが多いが、之は〔ai〕或は〔on〕が一音節に發音されるために、アクセントの山が次の音節へずれたのである。[14] 之等の東京語で所謂起伏式動詞の否

定形にも興味ある型の對應關係が見られる。(但し「書かない」等と「書かん」等とがそのまゝ對應する形とは云へない)

| | 東京 | 十津川 | 高知 |
|---|---|---|---|
| 書 | カカナイ | カカン | カカン |
| 受 | ウケナイ | ウケン | ウケン |
| 怒 | オコラナイ | オコラン | オコラン |
| 離 | ハナレナイ | ハナレン | ハナレン |

東京語で起伏式なる形容詞の連用形に於ても、次の如き關係が見出される。

| | 東京 | 十津川 | 高知 |
|---|---|---|---|
| 白 | シロク | シロー | シロー |
| 辛 | カラク | カロー | カロー |
| 廣 | ヒロク | ヒロー | ヒロー |

その他色々の點で型の對應が見出されるが、省略することにする。

以上述べた所より歸納すると、東京語に於て起伏式なる語（平板式のものには問題があるから略する）に關して見出される型の對應關係は、三字以上の文節に於ては、次の様である。（高知方言を「甲」、東京・十津川方言を「乙」と略稱しよう。）

【第一則】三字の文節に於て、甲の〔○|○○〕は乙の〔○○|○〕に對應する。

例證

（一）三字口語一段活用動詞の終止形

甲、オ｜チル　乙、オチ｜ル

（二）三字四段活用動詞の終止形

甲、ア｜マル　乙、アマ｜ル

（三）三字の形容詞の終止形

甲、カ｜ライ　乙、カラ｜イ

（四）二字四段活用動詞の否定形

甲、カ｜カン　乙、カカ｜ン

（五）三字口語一段活用動詞の否定形

甲、ウ｜ケン　乙、ウケ｜ン

（六）二字四段活用動詞の過去形（但し、平板式の語）

甲、オ｜イタ　乙、オイ｜タ

（七）三字口語一段活用動詞の過去形（但し、平板式の語）

甲、ア｜テタ　乙、アテ｜タ

（八）三字の名詞（？）

甲、ココロ　　乙、ココロ

【第二則】三字の文節に於て、甲の〔○○○〕は乙の〔○○○〕に對應する。

例證

（一）二字四段活用動詞の過去形

甲、カイタ　　乙、カイタ

（二）三字口語一段活用動詞の過去形

甲、ウケタ　　乙、ウケタ

（三）三字形容詞の連用形

甲、シロー　　乙、シロク、シロー

（四）三字の名詞(?)

甲、カムト　　乙、カブト

【第三則】三字の文節に於て、甲の〔○○○〕は乙の〔○○○〕に對應する。

例證

三字の名詞

甲、カガミ　　乙、カガミ

【第四則】四字の文節に於て、甲の〔○○○○〕は乙の〔○○○○〕に對應する。

例證

（一）三字四段活用動詞の過去形

甲、イ|ソイダ　　乙、イソ|イダ

（二）四字口語一段活用動詞の過去形

甲、ハ|ナレタ　　乙、ハナ|レタ

【第五則】四字の文節に於て、甲の「〇|〇〇〇」は乙の「〇〇|〇〇」に對應する。

例證

（一）四字口語一段活用動詞の終止形

甲、ハ|ナレル　　乙、ハナ|レル

（二）三字四段活用動詞の否定形

甲、オ|コラン　　乙、オコ|ラン

（三）四字口語一段活用動詞の否定形

甲、ハ|ナレン　　乙、ハナ|レン

（四）三字四段活用動詞の過去形（但し、平板式の語）

甲、オ|ドイタ　　乙、オド|イタ

（五）四字口語一段活用動詞の過去形（但し、平板式の語）

尙、名詞は助詞と共に文節を形作るから、助詞のついた場合のアクセントについて考察すべきものとすれば、

甲、カサネタ　乙、カサネタ

| | 甲 | 乙 |
|---|---|---|
| (一) | アシガ(足) | アシか |
| (二) | アキガ(秋) | アキか |

の中、(一)は第一則への、(二)は第二則への例證とならう。而して

甲、カガミガ　乙、カガミか

は第五則への例證となつて、第三則が消滅する事になる。又第一則の例證(八)は第四則の例證となり、第二則の例證(四)は除かるべきことゝなる。尙、右に動詞の過去形と呼んだもの卽ち「……た」は古くは「……たり」で四字であるから、「……て」の形の方がよいのであるが、ノートの都合上之によつた。又「……て」の形については多少問題もある。

さて、右の四つの法則(第三則は除く)について見るに、甲方言と乙方言との相違は、アクセントの山が一音節づつ[15]くひちがつてゐる點にある。而して第一・第四・第五の法則に於ては、乙方言の方がアクセントの山が一音節づつ前進[16](卽ち次の音節へ移動)した如く思はれるし、第二則に於ては甲方言の方のアクセントの頂點が一音節だけ前進してゐる樣に見える。逆に云へば、第一・第四・第五の法則に於ては甲方言のアクセントの山が一音節づつ後退し、第二則に於ては乙方言の方のが一音節後退した樣にも見える。

兩方言のアクセントの中、いづれがより古形に近いかは容易に判斷出來ないが、私はこゝに細說する暇のない色々

の理由から、甲方言の方が古いとの說に傾いてゐる。もしさうだとすれば、第一・四・五に於てはアクセントの山が一音節づつ前進し、第二に於ては一音節後退して乙方言のアクセントが生じたと說明すべきであらうか。否、或場合には前進し或場合には後退したとは考へにくいと思ふ。私はこの第二則を、やはり頂點の前進によつて生じたものとして、次の如く說明したいのである。

○○|○＞○○○|＞○|○○|＞○|○○|＞○|○○

卽ち、第一音節に生じた副頂點が主頂點となり遂に唯一の頂點となつたと考へる。[17] 第三或は第四の狀態は、一見國語に於ては存在し得ない樣に思はれるかも知れぬが、第三の段階に近い狀態が、現在の方言の中に見出される故、[18] さほど不自然な考へ方でもなからう。第一の狀態より第二の狀態への變遷、卽ち頂點の前進は、勿論他の

○|○○＞○○|○(第一則)

○|○○○＞○○|○○(第四則)

○○|○○＞○○○|○(第五則)

等の、アクセントの山の大移動と同時に起つたものと考へるのである。[19]

右の如く考へる私の根據は、未だいづれも非常に有力なものではないから、今後の研究の餘地が充分あるのである。

本州方言内に於けるアクセントの分布狀態は、むしろ乙方言のアクセントを古いと考へるに有利の樣ではある。

國語内に、右にあげた二種類のアクセントの外に、まだ種類があるか。簡單に答へることは出來ない。仙臺方言のアクセントは、私の觀察した限りでは、非常に變つたものであるが、それは祖語のアクセントを失つたもので、第三

種として擧ぐべきものではない。九州方言のアクセントは充分な調査が出來てゐない。琉球方言のアクセントについては雜誌「方言」に於て細說する筈であるから、こゝでは省筆したい。

**註**

1 「音韻法則」Lautgesetz なる語は、西洋でも日本でも、本質的に異なつた二つの概念のいづれをも表はす爲に用ゐられることがある。即ちこゝに述べたものの外に、「或位置にある或音韻Aは音韻Bに變じやすい」と云ふ一般的な傾向をも「音韻法則」と云ふことがあるのである。(例へば、'Grammonts Lautgesetze' E. Hermann : Lautgesetz und Analogie, 62頁) 併し乍ら、前者は「音韻對應の通則」とでも云ふべきもの(A. Meillet 氏の 'règles de correspondances phonétiques')で、後者は「音韻變遷或は變化の傾向」と云ふ程のものである。前者は歷史的事實中に見出される所のもので、單に歸納によつてのみ知り得る。後者は歷史的事實より歸納的にも知り得、音聲學等の知識により演繹的にも考へ得る所のものである。故に兩者を同一の名稱で呼ぶのはよくない。私は前者のみを「音韻法則」と呼ぶことにしてゐる。その習慣の方が有力な樣だから。

2 私は郷里の方言と東京語とのアクセントの比較に出發して、方々の本州方言に於てこの種の法則に氣附きながら、琉球語のアクセントを調査するに及んで始めて、その言語史的意義を明瞭にさとつた。有坂秀世君は、本州方言について御自身で發見されたこの種の法則を、この意味で重要視すべきことに夙に氣附いて居られたのであつた。

3 例へば「パン」「インキ」等。

4 「方言」二ノ八、九頁。

5 貸借と云ふよりも、近畿よりの輸出であつたかも知れない。柳田國男氏の方言周圏論(「蝸牛考」言語誌叢刊、刀江書院、昭和五年七月) 比較。

6 「方言」二ノ一、二五頁以下比較。

7 「方言」一ノ四、一二頁以下參照。なほ「土の香」八ノ三（昭和八年一月）の拙稿『「土の香」第四十二號の「アクセント研究」を讀みて』一三二—三頁比較。

8 氏の御好意により、松江方言のアクセントに關する委しい御研究を拜見するを得た。

9 「蝸牛考」三頁。

10 なほ、「方言」一ノ三、一九頁以下參照。調査した語數については、同じく一四—八頁參照。

11 東京方言よりも中原方言の方が高知方言との型の對應關係が明瞭にわかるのは、東京には他地方よりの移住者が多い爲にアクセントが亂れたのではないかと思ふ。以下に述べる所によつて明かになる如く、動詞や形容詞については明瞭な對應關係が見出されるに對し、名詞の狀態がこの樣であるのは興味がある。

12 本章四三—四頁參照。

13 こゝまでにあげた語例については、東京語と殆んど同じアクセントである。

14 文章語の〔カキ|タリ、ノミ|タリ、ヨミ|タリ〕と云ふアクセント比較。

15 古代語に於ては、和語の一字は一音節であつた。東京語の〔kairu, to:ru〕も古くは〔kaꜰeru, toꜰoru〕に近いものであつたらうと考へられる。こゝでは「字」のかはりに「音節」と云はう。

16 言語學に云ふ'progressive assimilation'の'progressive'と同じ用法である。

17 甲の〔カク|（書）、ヨム|（讀）〕等に對する乙の〔カ|ク、ヨ|ム〕は、恐らく獨自の變遷によるものではなく、〔カ|イタ、ヨ|ンダ〕（形はこのまゝでなかつたらうが）と云ふアクセントが成立してから、それ（外の活用形もあるが）に類推して第一音節に頂點の來る樣になつたものではないかと思ふ。

18 第三章二五—七頁參照。鹿兒島縣薩摩郡宮之城町の方言にも同樣な現象がある。

19 隨分古い事ではあらうがその時代を適確に知ることは勿論ほとんど不可能である。こゝに述べた私の假說が正しいとすれば、國語の歴史時代を去るずつと以前のことではないかと思ふ。

# 第五章　國語のアクセント研究の收穫

國語諸方言のアクセントに關する研究の、國語學への貢獻は、今日までの所でも決して尠しとせぬ。以下に私の氣附いた點について秩序なく述べよう。

第一に方言境界線の問題がある。歐洲の學界で近時著しい發達を見た言語地理學は、その結論の一つとして、平坦地に於ける明瞭な方言境界線の存在を否定してゐる。併しそれは、實例が見出されなかつたまでのことで、理論上はその存在が必ずしも不可能ではないと思はれる。我國に於ても、語彙や語法を主として研究してゐた間は、明瞭な境界線の存在が主張されなかつた樣だが、アクセントの地理的調査によつて、近畿方言の東と西に隨分明瞭な境界線が發見されたのである。今後も、まだ他の地方に發見され得る可能性がある。(1)

次に、方言の系統の問題。東條操教授によつて「瀨戸內海方言」なるものが唱へられてゐたが、アクセントの上から見て、四國方言と中國方言とは截然と區別すべきものなることが明かとなつた。又、四國方言は近畿方言と同じ系統のアクセントを有するが、中國方言が名古屋以東の東海道地方の方言と同系統のアクセントを有するは注意すべきで、從來の如く、近畿以西の本州方言をまとめて「本州西部方言」と呼ぶことは、穩當ではないと思はれる。大和十津川地

方のアクセントが東京語のそれと全く系統を同じうし、近畿方言の中の方言の島をなしてゐるらしいこと(2)は注意すべき事實である。四國の幡多郡のアクセントが東京語のに類似してゐると云はれる(3)のも見逃すべきではない。私は先に、アクセントを根據にして、次の如き方言の親族關係に關する臆説を發表しておいた。(4)

祖語
- 甲種方言
  - 近畿方言
  - 四國方言
- 乙種方言
  - 東方方言
  - 山陽道方言

（今日の知識によると、右の「山陽道方言」は「中國方言」と改むべきである。）この臆説は、甲種方言と乙種方言とのアクセントの相違が生じたのは、即ち頂點の移動の起つたのは非常に古い事で、それが之等諸方言に於ける方言的差異として最初の顯著なものであつた事を意味するが、その中の一つの場合として、アクセント頂點の移動の起つた當時に於ては、兩方言（甲種、乙種）は何かの原因によつて隔離され乍らも、各々は一續きの地域に行はれて比較的統一ある狀態を保つてゐた事をも意味し得る。而してこの場合に、第四章に述べた如く、假りに乙種方言のアクセントの方が改新を蒙つたものとすれば、民族移動なる事實を想像しなければならない事となる。(5)併し、かゝる點にまで深入りして大膽な假説を強く主張するには、アクセント分布に關する地理的調査さへまだ不完全に過ぎるのである。近畿地方より東北へかけての日本海沿岸地方、(6)四國幡多郡地方の方言の狀態が不明なのは遺憾に堪へない。九州地方（殊にその東南部）のアクセントの系統が不明(7)なのは、一層その感を深からしめる。東北地方には、仙臺方言の如き變つたものもあるが、青森・盛岡の或方言のアクセントは、明瞭にはわからないけれども、乙種方言の系統のものらしい。

次に、琉球語の系統問題。琉球地方に行はれてゐる言語が本州地方等に行はれてゐる言語と同系であることは、音韻・語彙・語法の點より見て全く疑へぬ事實であるが、アクセントの研究は、更に一つの根據を同系論に加へた。例へば、(8)首里語と東京語とを比較すると次の様である。(「ティ、ディ、フィ」は夫々〔ti,di,Fi〕である。)

| 首里語 | | 東京語 |
|---|---|---|
| アキティ | 開 | アケテ |
| タミティ | 溜 | タメテ |
| ニーティ | 煮 | ニエテ |
| フリティ | 惚 | ホレテ |
| カキティ | 掛 | カケテ |
| タミティ | 矯 | タメテ |
| ミーティ | 見 | ミエテ |
| ハリティ | 晴 | ハレテ |
| アワティティ | 周章 | アワテテ |
| カサニティ | 重 | カサネテ |
| ウカビティ | 浮 | ウカベテ |
| カタミティ | 固 | カタメテ |

| | | |
|---|---|---|
| フィダティティ | 隔 | ヘダテテ |
| タズニティ | 尋 | タズネテ |
| シラビティ | 調 | シラベテ |
| サダミティ | 定 | サダメテ |

右にあげた語に於ける兩言語の型の對應は決して偶然事とすることが出來ない。又一方から他方への輸入によつて生じた事實でもあり得ない（平板・起伏の關係が逆になつて居る）。それは、兩言語の共同祖語を想定することによつてのみ說明されるのである。而して右の事實は、之等の單語が各言語に於て祖語より直接受繼がれたものなることをも證してゐる。私はこの種の型の對應關係が、更に廣範圍の單語について、本州方言と、沖繩方言の或もの（首里方言・那覇方言・國頭郡今歸仁與那峯方言・鹿兒島縣大島郡喜界ケ島阿傳方言）との間に存することを見出した。

最後に語原の問題。國語固有のものと考へられる單語の中には、現今では意味も形も互にかなり相違して了つてゐるが、古い時代に同一の語根から派生したと考へられるものがある。それ等は規則正しい母音交替によつて證明されるが、更にアクセントの關係によつてもその點を明かになし得る。例へば次の諸單語の東京・高知（一宮）・與那峯（琉球）の諸方言に於けるアクセントを比較すると、（「荒い」については兩方言とも調査しなかた。與那峯方言では、（ン）は〔ŋ〕、平假名であらはした音節はその子音が「無氣音」、左側の（。）はその音節の母音が無聲。）、

| | 東京 | 高知 | 與那峯 |
|---|---|---|---|
| 赤（A） | アカイ | アカイ | °ハかーシェン |
| 明（a） | アケル | アケル | °ハきールン |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 荒(A) | アライ | | |
| 荒(a) | アレル | アレル | アリールン |
| 暗(A) | クライ | クライ | クラーシェン |
| 暮(a) | クレル | クレル | クイールン |
| 高(B) | タカイ | タカイ | ターシェン |
| 長(b) | タケル | タケル | |
| 長(B) | ナガイ | ナガイ | ナガーシェン |
| 投(b) | ナゲル | ナゲル | ナギルン |
| 深(B) | フカイ | フカイ | プカーシェン |
| 更(b) | フケル | フケル | |

右に示した如く、A・a・B・bと記した語が地理的に遠く相離れた各方言に於て夫々同一の型に屬し、AとB、aとbが夫々違つた型に屬し、しかも、Aとa、Bとbが夫々型が類似してゐたり或は一致してゐる事は、偶然と云ふことが全く出來ない。之は、右に｛｝で結んだ一對づつの語が、同一の語根を含める事を確實に證明するものである。(9)

かくの如く、今後の語原研究には、アクセントや母音交替の法則などが考慮さるべきであつて、單に思ひつきの程度にとゞまる語原説は、國語學の信頼を受けることが出來ない。

この種の研究は、國語の系統に關する研究とも密接な關係がある。嚴密な語原研究によつて、始めて同一語根を含

めることの明かになる樣な語は、古くから國語に存したもので、その中には恐らく國語固有の單語が多いであらう。故に、國語が他の如何なる言語と同系なるかを明かにせんとするには、この種の單語を出發點として比較研究を始めるが有利であると思ふ。國語のこの種の單語との間に明瞭な音韻法則の認められる單語を多く有する言語が見出されたならば、それが國語と同系であるとの判斷を下しても恐らく誤らないであらう。かくして見出された音韻法則を手掛りとしてあらゆる部分に關する比較研究を進めるならば有利であらうと思はれる。國語と朝鮮語・アルタイ語との比較研究には、インドゲルマン語の場合の如く、代名詞・數詞が重要な地位を占めない樣であり、インドゲルマン語式の 'declension, conjugation' の存在しない事が、之等の言語の比較研究を非常に困難ならしめる。そこで、殘された最も有利な方法は上述の如きものではないかと思ふのである。斷片的な單語の比較對照は、その間に嚴密な音韻法則の見出されるのでない限り(單に漠然とした音韻相當の傾向では駄目である)、多く集めても證明にはならない。國語と朝鮮語との場合の如きは、當然單語の貸借關係が想像される。又、語順の一致や、助詞・助動詞の類の並行的な發達や、造語法上の類似點を指摘しても、根本的な單語の一致や助詞・助動詞或は接尾辭(接頭辭)そのものの一致を、音韻法則によつて證明しなければ、兩言語の同系なることは證明されないのである。云はゞ建築様式の一致を指摘しても、材料そのものの一致を明かにしなければ、證明にはならないのである。(10)

註 1 參照、「音聲の研究Ⅲ」の拙稿。「方言」二ノ三「中國・近畿兩地方アクセントの境界線」(大原孝道氏調査)。「土の香」創刊第五周年記念號(昭和八年五月)の拙稿。

2 參照、「方言」二ノ八、吉町義雄氏「所謂十津川アクセントの一例」。「方言」三ノ六、七七頁。

3 「方言」一ノ二、中平悦麿氏「幡多方言の地位」參照。

4 「方言」一ノ四、二五頁參照。

5 この點に關する私の考へは、發表したくないのであるが、誰もさう云ふことを考へずに今後幾年もたつ事は殘念であるから、こゝに記して置かう。實は何年も前から持て餘して居る妄想なのである。この場合に最も可能性の多く思はれるに、四國方面より近畿地方への甲種方言を話す民族の移動である。その時、本州には既に乙種方言が成立してゐて、甲種方言の割込みにより中國と東國に切斷され、その破片を十津川の山岳地方に殘したと云ふのである。「同じ言語でアクセントが違つてゐるに過ぎないのだから」とてこの考へを頭から否定する人もあらうが、長年の接觸によつて他の點は平均したけれどもアクセントの差異のみが殘つたとも考へられる。十津川アクセントの分布についてお話しした所、金田一京助先生は上代史に見える「國樔」族と關係づけて考へられようと云はれたが、實際日本書紀應神天皇十九年の記錄は、支那の歷史記述法にならつたもので、異人種に非ずして風俗言語の相當異なる同民族（甲種方言を話す近畿人より見れば乙種方言を話すもの）を異人種の如く書いたものと解釋することも出來る。（本年五月十五日の東京方言學會の第四回例會でこのことをお話しして置いた。）この民族移動の臆說と關係づけて考へられる歷史的事實は外にもある。

近畿を中心にしてアクセントの大變遷が起り、その周圍（東方・十津川・中國）に古いアクセントが殘つたとも考へられるのであつて、右の考へが唯一のものでは勿論ない。私もこの說を強く主張するのではなく、たゞ參考までに記した次第である。

6 「方言」二ノ五の拙稿二十六頁にあげた三ケ條の中、二と三は根據にならない事が、その後の研究によつて明かとなつた。

7 「土の香」八ノ一（昭和七年十一月）の「アクセント研究」の中なる北山長雄氏の報告。「方言」二ノ二、六—七頁。

8 比嘉春潮氏による。

9 「長い」と「投げる」の如きは、この根據がなかつたならば一笑に附せられるかも知れない。

10 H. Pedersen (J. W. Spargo譯): Linguistic Science in the Nineteenth Century (Cambridge, 1931) p. 245-6. 比較。

## アクセント調査のための語彙

（一）一字の名詞

木、毛、粉、巣、田、血、手、名、菜、荷、根、葉、歯、日、火、帆、穂、實、目、湯、輪、緒。

（二）二字の名詞

赤、汗、跡、雨、息、石、板、絲、色、牛、臼、歌、腕、上、海、音、親、影（蔭）、風、肩、金、疵（傷）、霧、草、口、頸、雲、腰、聲、砂、種、爪、露、鳥、中、夏、鼻、花、羽（翼、翅）、髭、人、晝、舟、冬、星、骨、松、前、水、耳、胸、山、夜、桶。

（三）三字の名詞

鏡、形、刀、昨日、車、心、力、所、裸、畠、昔。

（四）二字の動詞

おく（置）、かく（書、掻）、かふ（買）、こぐ（漕）、さす（刺、注）、たつ（立）、つぐ（繼、接、注）、つむ（積）、とぶ（飛、跳）、なる（鳴）、なる（成）、のむ（飲）、はふ（這）、ふる（振）、ふる（降）、ほす（乾）、まく（巻）、まく（蒔、撒）、まつ

（待）、よむ（讀、算）。

しぬ（死）、ある（有）、をる（居）、ゐる（居）、きる（着）、みる（見）、ける（蹴）、くる（來）、する（爲）。（動物の存在をあらはす動詞として「をる、ゐる」のいづれを用ゐるか。但し、「ある」を用ゐる方言もある」

（五） 三字口語一段活用動詞

あける（開、明）、あてる（當）、おきる（起）、おちる（落）、かける（掛）、かへる（變、換）、たてる（立）、ためる（溜）、つめる（詰）、にえる（煮）、のせる（載）、はねる（撥、跳）、はれる（晴）、ほれる（惚）、みせる（見）。

（六） 三字四段活用動詞

あそぶ（遊）、あたる（當）、あまる（餘）、あるく（歩）、うたふ（歌）、うらむ（怨）、おもふ（思）、かくす（匿）、かざる（飾）、くもる（曇）、ころす（殺）、とほる（通）、ひらく（開）、ならふ（習）。

（七） 四字口語一段活用動詞

あつめる（集）、うまれる（生）、かさねる（重）、しらべる（調）、たづねる（尋）、ながれる（流）、ならべる（並）、はじめる（始）、はなれる（離）、わすれる（忘）。

（八） 三字形容詞

あかい（赤）、あまい（甘）、あつい（暑、熱）、からい（辛）、くらい（暗）、しろい（白）、ふかい（深）。

**注意（一）** 意味が標準語とかなり違つてゐても右にあげた單語と形が同じか或は近似してゐるものを調査すること。同じ意味で形の全く別な單語のみを記載してはいけない。

（二）外によく用ゐられる同義語があつても、右にあげた語が少しでも用ゐられる限りはそのアクセントを調べること。（一字の名詞には、それ等よりもよく用ゐる長い形の同義語が多からう。）但し、その場合には註を忘れてはならない。

（三）新しく標準語又は他方言よりはひつた事の明かな單語はその旨註記すること。

（四）名詞は、色々の助詞がついた場合のアクセントを觀察すること。少くとも次の助詞についての觀察を省略してはならない（但し、琉球方言はやゝ事情が異なる）。

が　は　の　を　に　へ　も

その方言で用ゐない助詞は註記すること。

（五）動詞・形容詞は、色々の活用形（廣義。助詞・助動詞のついた文節をも含む）のアクセントを調べること。少くとも次の活用形の調査を省略してはならない（名稱は便宜的なものに過ぎない）。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 動詞…… | 否定形 | 書かない／書かん | 受けない／受けん | 等 |
| | 完了形 | 書いた、書いて | 受けた、受けて | 等 |
| | 禁止形 | 書くな | 受けるな | 等 |
| | 連體形 | 書く（人） | 受ける（人） | 等 |
| | 命令形 | 書け | 受けろ／受けよ | 等 |
| 形容詞… | 連用形 | 赤く／赤う | 白く／白う | 等 |
| | 連體形 | 赤い（花） | 白い（花） | 等 |

普通の口語文典では動詞の終止形に禁止の助詞「な」がつくと説明してゐるが、「禁止形」の中に含まれてゐる終止形と同じ形の部分が、單獨の終止形とアクセントの異なる場合がある。例へば高知方言では、「アタル」（當）「アタルナ」。

右にあげた活用形は、全然用ゐられないならば兎も角も、少しでも用ゐられる限りは記載すること。意味が近くて頻繁に用ゐられるが而も右にあげたものとは全く別の活用形に由來する形のみをそのかはりに書くのはよくない。例へば否定形として「カカセン、カカヘン、カケヘン」（近畿。「書きはせぬ」より來た）のみを記したり、命令形として「書きなさい、お書き」等のみをあげる如きである。但し、それより外に用ゐない場合は勿論致し方がない。

右にあげた種類の單語に於てのみ型の對應が認められるのではない。更に字數の多い語に於ても、副詞や接續詞の類にも、一部分の方言に於ては型の對應關係が見出される。篤志家は一層深い研究へ進まれたい。

昭和八年八月二十日印刷
昭和八年八月三十日發行

國語科學講座（第三回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院